この都市がおかしいのはどう考えても転生者が悪い！

あまねぎ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

再誕都市コルベニク。この都市はグレンダン以上に狂った都市である（いろんな意味で）。そこで生まれた一人の少女が都市と都市の大人たちに色々と翻弄される話です。

※この作品は作者の悪乗り１００パーセントで書いてあります。ネタです

目次

第1話　再誕都市コルベニクでの汚染獣戦（前編）――――1
第2話　再誕都市コルベニクでの汚染獣戦（中編）――――15
第3話　再誕都市コルベニクでの汚染獣戦（後編）――――26
第4話　平和な朝の日常――――38
第5話　テニスの覇王様1――――51
第6話　テニスの覇王様2――――62
第7話　テニスの覇王様3――――79
幕間　八相会議――――104
第8話　小学校がおかしいのはどう考えても転生者が悪い！――――119
第9話　都市戦争と外道たち――――133
第10話　今日はお休み！――――155

第1話　再誕都市コルベニクでの汚染獣戦（前編）

現在、私を含め再誕都市コルベニクにいる多くの武芸者たちが都市の外縁部東西区のエアフィルター近くに集まっている。
何故エアフィルター近くにいるかというと理由は簡単。それは――
ブウウウゥゥゥ
…………………………………………。
響く不快な羽音、そして視界を埋め尽くさんばかりの小型自動車くらいある蟲の大群。
人類の敵、汚染獣が来たのだ。
鬱です。実に憂鬱です。
近づいてきている汚染獣から視線を変え、周りの武芸者たちを見てみる。
私の周りにいるのは数百人の大人武芸者たちと１２歳～１５歳くらいの少年少女の子供武芸者たち数十人。
子供武芸者たちは汚染獣と初戦闘のためか緊張半分、興奮半分といったところ。大人

武芸者たちはなんか……めっちゃ目がキラキラと輝いてる。まるでこれから新しいおもちゃで遊ぶ子供みたいにテンション上がっている。

もう一度言おう。鬱です。実に憂鬱です。

『射撃部隊準備整いました。これよりカウントを開始します』

武芸者をサポートする念威操者の機械的な声が響くと同時に周りの緩まった雰囲気が緊張に変わる。

『３』

別に汚染獣との戦闘が嫌なわけではない。私は他人よりも武芸の才能があったのかそれこそ８歳のころから雄性体との戦闘経験がある。今日相手するのはいつも戦っている雄性体や管理局の白い悪魔的な我が師匠ではなく産まれたばかりの幼生体。はっきり言って雑魚どもだ。

『２』

ではなぜ鬱かというと、ここにいる武芸者たちとの集団戦闘はいろいろと気疲れしそうだから。

『１』

遠くの建物の上に陣取ってる後方の射撃部隊を見る。

そこには巨大なマスケット銃型の剄羅砲を構える魔法少女型改造戦闘衣を着込む少

女を始めとしたコスプレイヤーたちがいた。
『0、射撃部隊攻撃開始！』
「ティロ・フィナーレ！」
外力系衝剄の変化、ティロ・フィナーレ
魔法少女のコスプレをした少女から放たれた剄の砲弾は幼生体の群れに命中し、轟音と共に幼生体達がはじけ飛んで肉塊に変わる。
そして周りの武芸者たちもはじけた。
「ティロ・フィナーレ来たあああああああああああああ！」
「マミさあああああああああああああああん！」

周りにいた武芸者――もとい、コスプレ武芸者たちが叫びだす。
うわぁ……。
そんな彼らにドン引きです。
「カラドボルグ！」
「雷（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）の暴風！」
「滅びよ・・・」
「行け、フィンファンネル！」

続いて残り射撃部隊の武芸者たちが技名を叫びながら剄矢、剄弾、剄球、雷因性砲撃が幼生体の群れに向かって飛びかってゆく。

いろいろと突っ込みたいが、繰り出される剄技はどれも一流で次々と幼生体の甲殻を突き破り、バラバラになって周囲に落ちる。

ちなみに最後の人は超能力的直感で武芸者すら打倒できる化け物念威操者である。汚染獣の相手しないで武芸者のサポートにまわってください。

余波の爆風によって勢いをなくした幼生体たちはその場で着地する。

「よし、今まで夢見たキャラたちの技を奴らにぶつけるんだ！」

大隊長が叫び、武芸者たちが一斉に幼生体に向かって飛び込んだ。

ロボットみたいな全身装甲（フルスキン）から魔法少女姿の武芸者までいる武芸者集団（コスプレ）は百鬼夜行を思い起こし、それよりもおぞましい何かに見えた。

私もその集団の一人だと思うと……うん。死にたい。

何ていうか、他人の中二病とか見てると痛々しくて、一周回ってこっちも恥ずかしい。みたいな感じだ。

とはいえ、相手は人類の天敵、汚染獣。都市の危機だということは変わりない。

「私も都市を守る武芸者。都市のため行きましょう」

拳を握りしめ、私も汚染獣の波に深く高く飛び込んだ。

※

殴り、蹴り、掴み、投げ、砕く。

目に入った汚染獣を次々と殺してゆく。

すでに汚染獣を三桁は殺しているが私は傷一つ、戦闘衣にすら、汚染獣の体液の一滴すらついてないない。

当然だ。汚染獣の体液は汚染物質のかたまり。浴びるだけで皮膚を焼き、怪我を負う。

例え、戦闘衣を着込んで汚染物質を防いだとしても体液を浴びるようでは武芸者として三流だ。

「それにしても本当に数が多い」

幼生体を鋭い蹴りで真っ二つにする。

すでに他の武芸者含めて千体以上倒しているというのに勢いが減る様子は一向に見えない。

こうも減らないとうっとうしい。

目の前の幼生体の角を掴み、他の幼生体に向けて投げ飛ばすして、一息ついて周りを

見る。

「北斗百裂拳！」

「ペガサス流星拳！」

北斗神拳奥義　北斗百裂拳

外力系衝剄の変化　ペガサス流星拳

天馬星座の１３の星を描く拳と、正確に秘孔を突く百裂の拳によって、幼生体が高く空を舞う。

幼生体たちは錐揉み回転しながら背後へと流星のごとくきらめいたり、幼生体の関節があらぬ方向へと折れ曲がった後爆散したり、とやられてゆく。

ペガサス流星拳は正面から殴り、背後へ錐揉み回転させながら飛ばすには埃の一かけらでも感じるような正確な剄のコントロールが必要だ。

北斗百裂拳は相手の経絡秘孔（剄脈および神経回路）を正確に突き、そこに衝剄を潜り込ませることで肉体を変化させたり、爆裂させる奥義だが、汚染獣にやるには精密な剄の操作はもちろん、汚染獣の経絡秘孔（神経回路）を完全に把握する必要がある。

ぶっちゃけ、そんな難易度の高い技をやるより普通に剄を浸透させた拳で殴った方が楽だ。

まさしく無駄に洗礼された無駄のない無駄な動きの集大成な技である。

……。

北斗神拳伝承者と青銅聖闘士の反対側を向く。

そこには左手を天に掲げ、右手を地に構えた男が幼生体に囲まれていた。

「天よ叫べ！」

男が叫ぶ。

「地よ！　唸れ！」

幼生体たちが男を喰らうために群がる。

「今ここに！　魔の時代、来たる！」

男の闘志の表れなのか、彼の剄がきらめく。

「さあッ！　括目せよ！」

そして、汚染獣に告げる。

「天　地　魔　闘」

瞬間、汚染獣たちは手刀に砕かれ、掌底から放たれた衝撃破で吹き飛び、不死鳥の炎で焼かれた。

外力系衝剄の化練変化　カイザーフェニックス

活剄衝剄混合の化練変化　フェニックスウィング

外力系衝剄の変化　カラミティエンド

「これぞ、天地魔闘の構え」

……。

大魔王別方向をむく。

そこには太陽の子、もしくは光の王子がいた。

「おのれ、汚染獣め、ゆ゛る゛さ゛ん゛！　キングストーンフラッシュ！」

外力系衝剄の変化　キングストーンフラッシュ

その時不思議な事が起こった！

なぜか幼生体たちがやられていた。

いや本当に。なんか一瞬光ったかと思ったら幼生体たちが消滅してました。……もう全部あいつひとりでいいんじゃないかな？

と、相変わらず、この都市の熟練武芸者のいろんな意味で化け物っぷりにＳＡＮ値がガリガリ削られていると、赤い球体型の念威端子がこちらに来た。

『少し、良いだろうか？』

端子から聞こえるのはこの部隊の指揮官の声。

「はい。なんでしょうか？」

幼生体を殴り飛ばしながら答える。

『汚染獣の数が予想以上に多く、取りこぼしが多いためか後方の新人たちが苦戦してい

る。そちらの援護に回ってくれないか？』
「あれ、でも新人たちの護衛にディオさんと志々雄さんがいましたよね？」
ディオと志々雄。名前でわかるとおり二人とも某ジャンプ漫画を元にしたコスプレ武芸者である。
ちなみにディオさんは気化冷凍法の氷、志々雄さんは秘剣の炎を剄技で完全再現させた程の実力者として知らされてる。
『あの二人は現在病院に運ばれている』
「え？　あの二人、幼生体にやられたんですか？」
あの二人の実力は周りにいる武芸者たちと同格くらいだ。そんな二人が負傷した？
『いや、ディオは空裂眼刺驚（スペースリパー・スティンギーアイズ）をやろうとして両目を失明し、志々雄は限界まで内力系活剄で体温を上げた結果、人体自然発火現象が起きて燃えた』
ただの自滅でした。
『そこに追い打ちで、射撃部隊の十球打ち百八式波動球の流れ球を食らい、二人とも再起不能状態だ』
「あはははは。帰っていいですか？」
『気持ちはわかるが、ダメだ』
ですよねー。

「……はぁ、わかりました。すぐ向かいます。それと、汚染獣の母体は見つかりましたか？」

汚染獣の幼生体の群れには必ず母体である雌性体がいる。

雌性体は一定以上の幼生体を殺すと近くの汚染獣を呼び寄せる性質を持っている。だから、雌性体と幼生体の汚染獣討伐においては幼生体を狩る部隊と雌性体を狩る部隊に分かれる。

『現在地下の７２％探索が完了した。あと予想では１０分以内に母体を発見できるだろう。

これが今から援護に行ってほしい新人たちのいる地区だ』

念威端子から表示される地区はここから数百メルトル先。武芸者である緑の光点は汚染獣である赤い光点百数体に囲まれていた。

新人たちの実力は確か幼生体の甲殻を砕ける程度はあるが、この数は厳しいだろう。

「了解しました。今から行きます。後ろをぶち抜くので射線上から味方を離すよう誘導してください」

『了解した。１０秒ほど待ってくれ』

後ろを振り向き、全身に剄をめぐらせる。そして、右手甲の紅玉錬金銅が自壊する寸前まで集束し、剄の輝きが増す。

最前線に配置された武芸者だけあって味方武芸者はすでに私の射線から離れている。
狙うは背後にいる最前線から取りこぼした幼生体数十匹の波。
私の放つ剄の危険性を感じたのか、近くにいた幼生体が襲ってくるが遅い。
「覇王」
一言つぶやき、一歩を深く踏み込む。活剄で強化された脚力で床が窪む。
繰り出すのは私が持つ最強の剄技。戦乱の世で覇王が身につけし技。
紅く輝く右腕を幼生体の群れに振り下ろす。
「断　空　拳!!」
ベルカ古流武術覇王流（カイザーアーツ）　覇王　断空拳
振り下ろした拳は籠めた衝剄とともに最後尾にいる幼生体まで届き、砕けた甲殻と肉塊へと変わり果てる。
私――アインハルトの正面には地面が抉れ、幼生体の姿はなく、幼生体の群れが形成していた波が開いた。
そして、周りの武芸者が今の一撃でざわめく。
「出た！　アインハルトさんの覇王　断空拳だ！」
「その技自分で考えたんですか!?」
「アインハルトさん、いつテイルズ作品に出るんですか!?」

「コスプレ戦闘衣の姿に恥ずかしがっても、ノリノリで技名を叫ぶハルにゃんマジ覇王！」

全力で放った一撃で幼生体を屠った爽快感から一転、冷や水を浴びせたように現実に引き戻された。……恥ずかしさから顔震え、頬が紅潮してしまう。

追撃か周りからアインハルトコールが響く。

アインハルト！　アインハルト！　アインハルト！　アインハルト！　アインハルト！　アインハルト！　アインハルト！　アインハルト！

いじめかっ！

恥ずかしさにわなわなと震え、涙目になってしまう。

「ち、違います！　瞳が紫と蒼のオッドアイという理由だけで、師匠に無理やり覚えさせられたんです！　技名も叫ばないと師匠から剄弾が飛んでくるから……。う、うわああああああああああああああああああああああん!!」

この場を離れるため、念威操者から指定された新人たちがいるエリアに救援、もとい逃げ出す。活剄で肉体を強化して全力でその場を走り去った。

「……アインハルトちゃんってかわいいよな」
「うん。クールを装っているけど、恥ずかしがり屋な所とか特にいいよね」
「コスプレに染まり切ってないから煽るとちゃんと反応が返ってくるから苛めがいあるよな」
　この都市の武芸者（おとな）たちは最低だと思います（活剄で聴力が強化されていたため、ばっちり聞こえた）。

再誕都市コルベニク。ここで産まれる武芸者は全てが転生者というある意味、グレンダン以上に狂った都市である。

第2話　再誕都市コルベニクでの汚染獣戦（中編）

あの場から、逃げるために全力で駆け抜け、指定された防衛地区が見え始める。防衛地区には私よりも少し年上の少年、少女武芸者たちが幼生体相手に奮闘していた。

「トンファーキック！」

八頭身のトンファーを持った武芸者はなぜか手に持ったトンファーを使わず、脚で一体の幼生体を蹴り飛ばす。しかし、威力が足りないのか甲殻を貫けず、罅が入るだけで幼生体は後ろに吹き飛ぶ。

「ヒャッハー！　汚物は消毒だー！」

すかさず、モヒカン髪の男が飛んだ幼生体の甲殻が最も薄い部分の腹に火炎放射機型錬金鋼から放射される化練剄の炎で燃やす。その威力は幼生体を燃やし尽くすには十分なもので、甲殻が赤く変化し、溶け出す。

「ＲＸ師匠直伝！　宇宙ＣＱＣ　ニャル子クラッシュ！」

モヒカンの炎によって柔らかくなった甲殻に名状しがたきバールのような錬金鋼が突き刺さる。さらに幼生体を貫いた名状しがたきバールのような錬金鋼から衝剄が注ぎ込まれる。

アホ毛が特徴的な銀髪の少女は名状しがたきバールのような錬金鋼を引き抜いた後、幼生体の後ろを向き、名状しがたきバールのような錬金鋼を「N」の字を描く。

直後、少女の背後にいた幼生体が注がれた衝剄によって爆発した。

……うん。あんたら、なんでそのキャラをチョイスしたんですか!?

と心の中でツッコムが状況はあまりよろしくない。

最初の三人はともかく、他の新人武芸者たちはすでに息が切れ、剄息も乱れている。いつ誰かが負傷してもおかしくない状態だ。

走りながら私は周りの新人武芸者の位置を確認。新人武芸者の中心に向かって高く跳躍。

そのまま、背後に衝剄を放つことで急降下。落下と衝剄の勢いを乗せて地面に拳を振り下ろす。

「覇王流　破城槌!」

叩き付けた拳から放たれた化練剄が地面に浸透し、私を中心に剄で鋼よりも固く硬質化した地面が隆起する。新人武芸者を避け、幼生体のみに凶器と化した地面と地面を伝わった衝剄による衝撃破が襲い掛かる。

ベルカ式古武術覇王流（カイザーアーツ）　破城槌

幼生体たちは真下からの攻撃に対応できずに隆起に挟まれて、潰され、突き刺さり、衝

撃破によってバラバラになる。
　そして、またしても癖で技名を言ってしまったことに気づくが、時すでに遅く、助けられた武芸者たちが煽りだす。
「ありがとー！　ハルにゃん！　世界一かわいいよー！」
「うおおおお、ありがとー！　アインハルトさん！」
「その頭のフレンチクルーラー食べていいですか!?」
「アインハルトって男の名前ですけどその辺どう思っているんですかアインハルトさん――」
　――グシャンッ!!!
「「「……」」」
　恥ずかしさから顔が赤くなりながらも、無言で足元に転がっていた幼生体の甲殻ごと思いっきり、踏みつぶす。踏みつぶした脚は幼生体の体液を散らしながら地面を砕き、震脚の振動でこの地区全体が揺れる。
　煽ってた武芸者たちが一斉に黙りだす。
「こほん、前線から救援に来ましたアインハルト・ストラトスです。この部隊の指揮官はどなたですか?」
「いやー、助かりましたアインハルトちゃん。あ、今現在、私がこの地区の指揮官やって

ます」

答えたのは先ほど幼生体を駆除した銀髪の少女。

「ネリーさん」

「違いますよ。ニャル子という戦名（いくさな）があるんですから私の事はネリーではなくニャル子とおよびください」

戦名（いくさな）。

再誕都市コルベニクに伝わる風習で、一人前と認められた武芸者には過去、汚染物質が存在しなかった頃の世界の英雄と呼ばれた人物の名が授けられるというものだ。……実際は一人前の武芸者になったらコスプレの元ネタの名前を堂々と名乗ることができるようにするため、過去の転生者が作った慣わしである。

私も６歳のころから魔法少女リリカルなのはＶｉｖｉｄのキャラクター『アインハルト・ストラトス』を名乗っていて、本名は別である。

そういえば、戦名を貰って以来、本名呼ばれていませんね。

「それでネ……ニャル子さん、状況はどうですか？」

「護衛である志々雄さんとディオさんたちがやられてから重症者４名、軽傷者多数、幸い死者０名ってところですね。あと、モヒカン、八頭身モナー以外の武芸者たちはもう限界で正直、アインハルトちゃんが来なかったら撤退してましたね」

「なるほど……」
実質戦えるのは私含めて四人だけ……。なら。
「ニャル子さんたちは負傷者たちを連れて撤退してください。この戦線は私一人で支えます」
その言葉を聞きニャル子さんの目をむく。
「はい？　……いや、いくらアインハルトちゃんでもこの地区全部をカバーするのは無茶ですよ!?　さっきのＭＡＰ攻撃、範囲もこの地区を全体というわけありませんし」
「はい。確かにこの地区全てを大量にいる幼生体相手に防衛するのは難しいです。破城槌の範囲もそこまで広くありません」
破城槌の有効範囲は半径１０メルトル。とてもじゃないがこの地区全てをカバーできません。
「なら……！」
「ですから、防衛範囲を阻めます」
地面に拳を叩きつける。と言ってもやるのは先ほどの破城槌じゃない。
化練剄によって再び、ボコボコに隆起した地形が大きく変わる。
ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ。
姿を現したのは地区全体に広がるのはＶの字をした巨大な壁。汚染獣を阻む強固な

盾。それはまさしく城壁だった。

外力系衝剄の化練変化　創造城

「汚染獣の思考は基本、人間を食らうために前を進むだけです。その過程で通れない邪魔な建造物を壊すだけなので、汚染獣が進める範囲で壁を作り出せば、それだけで汚染獣の移動範囲は制限されます」

Ｖの字型した城壁の中央には１５メルトルくらいの入口を作ってあります。こちらに来る知能の低い幼生体はこの広さの城壁を登って進まずに、真っ直ぐこちらに来るでしょう。

「ではみなさん、撤退を」と声をかけるが、誰も反応しない。口を開きながら城壁を眺めている。

ニャル子さんが驚きながらも答える。

「前から出鱈目だとは思いましたが……アインハルトちゃんも大分化け物になってきましたね」

「コルベニクの上位者に比べればまだまだですよ。化錬剄が得意な武芸者達を参考にしただけですから」

ちなみに創造城を創るに当たって参考にしたのはマシュ・キリエライトさん。さすがに彼女みたいに城に伏剄を張り巡らせて反射能力持たせるみたいなことは出来ません

が。

とニャル子さんと話していると、再び幼生体たちがギチギチと不快な噛み音を鳴らしながらやってきた。その音を聞いて新人武芸者たちはすぐさま撤退を始める。……ニャル子さんを除いて。

「……撤退しないんですか？」

苦笑いするニャル子さん。

「まだ私は余裕がありますし一応、この地区の指揮官ですからね。部下を残していけませんよ」

「私の所属は前線部隊なんですが……」

「じゃあ、今すぐ我が軍門――もとい我が部隊に下れ！　と言いましょう」

そう言ってニャル子さんは城壁の上に飛び上り、城壁から私に向かって指を指す。

「ま、いくら幼生体が正面に向かっても数体は城壁を登って来るでしょうし。実力不足の私でも城壁を上がろうとしてる幼生体を衝剄で撃ち落とすことぐらいできますよ。それに年下の女の子一人を置いて行くようなことしたくありませんしね」

って、よく見るとこの城壁ねずみ返しついてますよ!?　うわー、徹底してますねー。と楽しそうに笑うニャル子さん。そんな風に無邪気に笑うニャル子さんに思わず、私も笑ってしまう。

「ふふ。……はい。では城壁を登る幼生体はお願いします。部隊長」
「まかされました！」

と、言ったのが３０分前。
現在ニャル子さんは……。
「おお、鋼糸でストーン・フリー再現するとかマジぱねぇ。ああ、ハリケーンミキサーで幼生体の体がバラバラに～～!?」
念威端子送られてくる前線部隊の戦いを実況していた。その間、私は黙々と幼生体を殺す作業をしています。
……３０分前の私の言葉と気持ちを返してほしい。
「……ニャル子さん。幼生体が登ってこないのは分かりますが、せめて前を見てくれませんか。それと誰ですか、前線部隊の映像を勝手に映してる念威操者は？」
『私です』
「うわッ!?」

突如、念威端子越しの映像から現れたのは腰まで届く程長く、根本から毛先までほのかな燐光の光を纏う蒼銀髪をツインテールにした、金色の瞳を持つ美しい念威操者の少女。

「なにしてるんですか？　念威操長」

彼女こそ、齢１２歳でコルベニクの念威操者の頂点に立った念威操長。電子の妖精の異名を持つホシノ・ルリさんだ。

『私と同じく暇そうにしてる武芸者と前線の汚染獣戦闘の観戦を少々』

「仕事してください。今人類の天敵である汚染獣が襲って来ているんですから」

『仕事してますよ。今回の私の仕事は汚染獣戦闘の記録撮影ですから……それに――』

――私が本気を出したら他の念威操者の仕事はなくりますよ。

画面越しだというのに彼女の言葉と笑顔に私はゾクリと震える。

今回の汚染獣戦では念威操長や師匠を始めとするコルベニクの最強クラスと呼ばれる武芸者は前線に出ていない。

理由は簡単。幼生体相手での汚染獣戦は新人、中堅武芸者の育成を主にしている。この都市最強クラスの武芸者が前線に出ると彼らだけで汚染獣を殲滅してしまうため、他の武芸者の成長にならないからだ。

これがコルベニク最強の念威操者……！

念威操者だというのにまるで師匠と相対しているような絶対に勝てないという威圧感をを感じる。

互いに無言になる。

「……」

『……』

「ルリルリ見てくださいよー！　ついに戸愚呂さんが内力系活剄で１００％になりましたよ！」

『え!?　本当ですか戸愚呂１００％超見たい』

まぁ、ニャル子さんのせいでなんかいろいろと台無しになりましたが。

私はせめてもの抵抗で、念威操長――ホシノ・ルリに聞く。

「……原作からして、そこはバカばっか。とつぶやくところじゃないんですか?」

『私は劇場版仕様ですので。それに……私も結構バカですから』

そうつぶやいて微笑むルリさん。

そして「この瞬間を待っていたんだー！」とか「教えてやる。これがモノを殺すっていうことだ」と叫んだり、中二全開のセリフで幼生体を屠る武芸者たちの映像を仲良く見る二人。

そんな二人を呆れながら見る私はため息を吐き、幼生体を蹴り飛ばすのだった。

第３話　再誕都市コルベニクでの汚染獣戦（後編）

「はぁ！」

拳撃とともに、剄で練った衝剄弾を幼生体にぶつける。その威力は幼生体の甲殻を砕き、後方にいた幼生体も巻き込んで幼生体の体液が巻き散る。

ベルカ古流武術覇王流（カイザーアーツ）　覇王空破断

あれから数分後、こちらに来る幼生体の数も多少減り、少し手持ち無沙汰になっているとニャル子さんが声をかけてきた。

「アインハルトちゃーん！　そろそろ母体討伐隊の母体討伐が始まりますからいっしょに見ませんか？」

「いえ、流石に観戦はちょっと……」

都市を守る武芸者として戦闘中（仕事中）に堂々とサボるのはまずいと思う。

「んもー、真面目ですねーアインハルトちゃんは。この都市に武芸者の誇り（笑）なんてないんですから、もう少しフランクになりましょうよ」

「いや……でも、いつ幼生体が来るかわかりませんし……」

『それならご安心を。念威端子で調べた所、次の幼生体がここに接敵するのは約７分後

です』

「それじゃあ、それまで休憩しましょう！　これ部隊長命令です」

「……はぁ。了解しました」

深くため息を吐く。

これ以上ごねると二人して私を脅すか、嫌がらせをするでしょうから素直に諦めることにしました。

私も城壁をジャンプして登り、ニャル子さんの隣に座る。

念威端子から送られてくる映像を見てみると、三人の武芸者が幼生体を倒しながら走っていた。高い反応速度持つ男は二刀流の剣で切り刻み、炎髪灼眼の少女は化練剄の炎を纏う刀で焼き切りながら、武芸者とは思えない体の細い白髪の少年は活剄と外力系衝剄に同時に行う技――金剛剄の反射で幼生体を吹き飛ばしながら、と三人の武芸者は母体に向かって真っ直ぐ突き進んでいた。

それはいい。……ですが。

「なんですか？　あの都市外戦スーツは」

画面越しに三人の武芸者を指さす。

一見、母体討伐隊の三人は都市外だというのに、都市外戦用装備の汚染物質遮断スーツを着ていないように見える。だが、一般人よりも眼が良い武芸者である私には彼らの

動き、なびかない髪などの微妙な違和感から透明なスーツを着込んでいるのがわかりました。

ニャル子さんがまるでアニメの科学者のように告げる。

「ふっふっふ、あれこそ、我が再誕都市コルベニクの技術の粋を集めて作った光学透過都市外戦スーツ！　通称〝バカじゃなくても見えないスーツ〟です！」

『コルベニクの技術は世界一～』

念威操長が高らかに、それでいて棒読みで叫ぶ。

「ちなみにこの〝バカじゃなくても見えないスーツ〟バッテリー量々の都合で光学透過できるのは約１５分です」

「……意味あるんですかそれ？」

『汚染獣戦闘の映像は汚染獣資料館に保管されたり、教材ビデオになったりします。つまり母体戦闘の資料ビデオの見栄えが良くなります』

「ほんっとうに！　この都市の武芸者バカしかいませんよね!!」

と三人で漫才をしている間に、討伐隊が母体の元へ辿りつきました。

討伐隊の目の前には幼生体をはるかにしのぐ巨大な汚染獣――雌性体。……それが三体いた。

今まさに決戦が始まろうとしたその時、思い出したかのようにルリさんが三人に念威

端子から話しかけた。
『あ、三人ともちょっといいですか？』
十代の武芸者の中でトップクラスの火力を持つ炎髪灼眼の少女――シャナさんが答える。
「なによ。ルリ、今から母体討伐って時に」
『いえ、ここにいる雌性体のうち、一体は剥製にして資料館に置きたいのでなるべく傷つけないで殺してください』
「はは、他の都市の武芸者が聞いたら発狂しそうな命令だな」
そう笑うのはＳＡＯ（ソードアート・オンライン）の英雄キリトさん。
「ンじゃあ、剥製にする母体はオレがやるか。最近覚えた血流操作をやってみてェ」
そのひょろい体を維持するため、武芸者なのに筋トレを一切せずにこの都市一の金剛剛の使い手になったという恐ろしい経歴を持つ白髪の男――　一方通行（アクセラレータ）さんがその命令をあっさり了承する。
「俺は右のやつをやる。一番火力の高いシャナはあの腹部の割れてないやつを頼む」
「まだ腹部割れてない……って、まだ中に幼生体が大量にいるやつじゃない！」
さり気に一番面倒なやつの相手を頼むキリトさんに文句を言うシャナさん。
「まぁ、いいわ。中の幼生体ごと燃やし尽くしてやるわ。二人とも行くわよ！」

シャナさんはそう言って、まだ腹部に幼生体を孕んでいるだろう母体に向かって駆け出します。同時にキリトさんと一方通行さんもそれぞれ相手する母体に向かって走り出しました。

一方通行さんが相手する母体はうめき声を上げながら自身の翅で彼を叩き付けようとする。幼生体よりも大きく、固い汚染獣の翅はそれだけで武芸者の体を傷つける十分脅威となる一撃。

一方通行さんはそれを――――

「わりィがここから先は一方通行だ」

正面から受け止め、通常の金剛剄の反射を上回る衝剄反射で翅を引きちぎりました。

活剄衝剄の混合変化　ベクトル反射

彼はそのまま、歩きながら母体の翅や脚の攻撃を全て反射して跳ね返す。母体に触れられるところまで行き、裂けた腹部に指を突き出して母体の内部に衝剄を注ぎ込まれる。

外力系衝剄の変化　血液逆流

一方通行さんの衝剄によって母体の体内は破壊され、内臓はぐちゃぐちゃ、赤い複眼や甲殻の隙間から体液が一気に噴き出して母体は無残に生体活動が停止した。

「剥製素材イッちょ上がりイッと」

そうつぶやく一方通行さんはまさに悪役の顔でした。
続いてキリトさんが討伐する母体を見ると、その母体は顎をカチカチと、殻と殻をカンカンとなる音に気がついだ。
私はその動作の意味を都市の資料で見たことがある。
あれは、仲間を呼ぶ予備動作……！
キリトさんもそれに気がついたのか、さらに加速します。
「モード……ＡＬＯ」
そう呟いたキリトさんの背中に剄で作られた妖精の羽が生える。
羽が羽ばたくと同時に剄羽からの衝剄が噴射されて超加速で母体の頭部に向かって飛翔する。
音を超える速さで母体にたどり着いたキリトさんはその勢いに乗ったまま、黒の鋼鉄錬金鋼と白の白銀錬金鋼の二刀を構え、叫んだ。
「スターバースト……ストリーム!!」
アインクラッド剣術二刀流　スターバースト・ストリーム
討伐部隊最速の剣が母体を襲う。星屑のように剄が煌めき、空間を灼くかのように飛び散る光の二刀の剣は母体の甲殻をやすやすと切り裂き、甲殻を、腹を、羽を、脚を、肉を、骨を、と次々と母体の体積が減っていく。結果。残ったのは数十にも分割された母

体の肉塊のみでした。

そして最後に、未だ腹の中に幼生体を残している母体を相手するシャナさんを見てみると、そこには圧倒的剄量の化練剄で紅蓮の炎を纏った巨大な腕を具現化させたシャナさんがいた。

自在法　真紅

「潰れなさい」

一言。

そう呟いて炎の魔神の拳で母体の腹めがけてぶん殴る。母体が絶叫する。

隣のニャル子さんが「妊婦に腹パンとかシャナさんマジ鬼畜！」とかつぶやいていますがそんなレベルじゃありません。

シャナさんの使った真紅で母体の腹を軽々と貫通しました。胎内に千体以上の幼生体が固まっているというのに。

真紅の拳を引き抜くと中に幼生体の姿はなく、ぽっかりと穴が開き胎内を炭に変えられた。

それでもこの世界の頂点に立つ汚染獣。母体の雌性体はまだわずかに息があった。

そんな死にかけの母体にもシャナさんは容赦しなかった。

彼女の手に持つのは紅玉錬金鋼の刀に火炎の炎を纏わせた大太刀どころではない—

――それこそ汚染獣を真っ二つにできるほどの火炎の刃。
自在法　断罪
「死ね」
明らかにオーバーキルな一撃を振り下ろし、母体はただの炭素のかたまりと化した。
結果として、三人の戦闘時間はわずか数秒で三体の雌性体は三人と武芸者によって死に絶えた。
母体討伐の戦闘が終わり、魅入っていたニャル子さんがふぅ、と息を吐く。
「流石、電撃三人衆ですねー。十代前半の武芸者でこの強さとか、アインハルトちゃん並みにありえねー」
「……え、私、彼らと同じカテゴリ扱いですか？」
ニャル子さん、念威操長の二人が何言ってんだ、こいつ……という目で見てくる。
ニャル子さんが悟るように口を開く。
「……アインハルトちゃん。６歳で雄性体討伐部隊に参加してる人は普通じゃないの。電撃三人衆以上の人外なの」
『私も人のこと言えませんが、アインハルトさんも十分異常な武芸者ですよ』
「でも師匠は９歳で雄性体５期を単独撃破したって聞きましたよ？」
「……なんでそこでコルベニク最強の武芸者と比べちゃうんですかねー？　ほんとアイ

ンハルトちゃんは天然というか残念というか……」
『都市戦争で天剣ごっことか言って、一人で他の都市の武芸者全員と制圧（おはなし）したなのはさんが人外ではないと？』
　え、あの人そんなことしたんですか？
　と改めて、我が師匠の強さに戦々恐々しているとニャル子さんがゆっくりと息を吐いた。
「はぁ、みなさん武芸の才能があってうらやましいですよ。転生したばかりの頃は俺ＴＵＥＥＥＥＥＥＥしてやろう思ってましたのにね……」
「どうしたんですか？　ニャル子さんらしくない」
『ニャル子さんも１１歳で戦名を授かり、同年代武芸者の部隊長に選ばれるんですから十分優秀な武芸者ですよ』
「いや……でも――――」
　その時、母体討伐隊のサポートをしていた念威操者の声が、都市全体に鳴り響く。
『――――母体すべての生体反応が消失しました。武芸者さんはこれより、幼生体の殲滅班は殲滅作業に移行してください』
　前線で戦っていた数人の武芸者たちの目がギラリと光り出す。
　今まで幼生体相手にしていた一部の武芸者――殲滅班――が殲滅モードに変わり出

す。

コルベニクでは複数体いる汚染獣の殲滅方法は二つあります。一つはコルベニク最強武芸者が広域殲滅剄技でまとめて殲滅する方法。もう一つは――

「D４C！」

「ロッソ・ファンタズマ！」

「プリキュアシャイニングサークル！」

「幻楽四重奏（げんがくカルテット）！」

「刻々帝（ザフキエル）　八の弾（ヘット）」

「一人でダブルスするよ」

「ディケイドイリュージョン！」

「多重影分身の術！」

「ゴッドシャドー！」

「ガードスキル　ハーモニクス」

「妄想幻像（ザバーニーヤ）」

「七人卸先」

――単純に物量で殲滅する方法です。

コルベニクの武芸者たちが化練剄による分身によっての数が数十倍に膨れ上がり、幼

生体の数を上回る。
そして、質、量共に上回る武芸者たちによる幼生体の殲滅するための蹂躙が始まる。
「Ｔｈｉｓ　ｗａｙ」
「食らえッ！　鋼糸による半径２０メートルのエメラルドスプラッシュをーーーッ！」
「トランザム！」
「風遁　螺旋手裏剣！」
「ライダーキック！」
「超級覇王電影球！」
「フルパワー１００％中の１００％！」
「滅びのバーストストリーム！」
「マスタースパーク！」
「バオウ・ザケルガ！」
それぞれ、自身が持つ必殺技を幼生体たちに叩き付ける武芸者たち。
私たちはそれを仲良く三人で見ている。
……うわぁ、雪をバーナーで炙るような勢いで幼生体が減って行きます。
「あれらを見て私が優秀な武芸者だと思いますか？」
「……」

『……』

ニャル子さんの問いに私たちは何も答えられませんでした。

わずか数分で数千体いた幼生体がすべて死に絶え、再び念威操者の声が響く。

『幼生体の殲滅を確認しました。これより、幼生体の死骸撤去作業に入ります。武芸者のみなさんも参加してください。自分で遊んだ汚染獣（おもちゃ）は自分で片づけましょう』

武芸者たちが、うぃー、お疲れ～、あー楽しかった、今日俺、プリキュアハッピーシャワー撃てて満足だわ。と互いに健闘しながら自分たちが遊んだ汚染獣（おもちゃ）の撤去作業を始める。

……この都市がおかしいのはどう考えても転生者が悪い！

そう思いながら私も死骸の撤去作用に入るのでした。

第４話　平和な朝の日常

テケ・リ、テケ・リリ

第４話　平和な朝の日常

テケ・リ、テケ・リリ

去年ニャル子さんから貰った目覚まし時計が鳴り響く。

「ん、……ふぁあ……っと」

眠気とＳＡＮ値が同時に削れそうな色々と危なそうな目覚まし時計を止める。

そのまま身体に残った睡魔からの誘惑に負けないよう、身体をゆっくりとベットから起き上がる。

……眠い。

結局、昨日来た汚染獣の死骸撤去作業は深夜三時まで及んだ。

私は子供だからもう帰って寝てもいいと皆さんに言われましたが、私も武芸者なので最後までやります。と言って内力系活系で眠気を誤魔化しながら作業をしました。

前世では夜更かしなんて慣れたものでしたが、今の私の肉体年齢は１０歳。頭と身体はまだ眠いと言っている。

少しでも目を覚まそうと身体を伸ばす。

「ん～～、よし！」

正直、このまま二度寝したいですがまだ寝ているであろう妹に朝食を作らないといけないので我慢します。

深夜に帰って、風呂にも入らずにすぐに寝てしまったので、目覚ましも兼ねて少し熱めシャワーを浴びる。

切るきっかけがなくて腰まで伸びた長い碧銀の髪が水を吸い、重くなる。

手入れに時間がかかり、夏場は熱く、横になったり、椅子に座るとたまに身体が髪を踏んづけてしまって色々と面倒な髪ですが、今では自慢の髪なのでしっかりと寝癖を梳かして髪を洗う。

２０分きっかりでシャワーを終えて洗面所で、白のブラウスに黒のスカートとシンプルな服に着替えてからドライヤーで髪を乾かして軽くワックスをかける。髪で髪を結ぶ特徴的なツインテールして、最後に赤いリボンをつける。最後に鏡で自身の格好を確認。

「って……今更ですが、なんで私は面倒くさい『アインハルト・ストラトス』の髪型をしているんでしょうか？」

自然とコスプレしてしまい、普通に自己嫌悪しました。

い、今から、髪を崩して結うのも面倒ですからこのままでいいでしょう。

と、なぜか言い訳してキッチンへ。そこであることに気がついた。

「あ、ご飯炊くの忘れてました」
ご飯を炊かずにすぐ寝てしまったため、炊飯器の中身は空っぽ。バケットも一昨日ホワイトシチューと一緒に食べてしまって無し。
米もパンもなし。となると……。
「まぁ、たまにはおやつじゃなくて朝でもいいでしょう」
そう言って、私は棚に置いてあるワッフルメーカーをテーブルへ。薄力粉を振るい、牛乳、卵黄、隠し味にヨーグルトを混ぜる。朝食用ワッフルなのでバターと砂糖はいつもよりも少なめに。卵白は泡立て器でしっかりと空気を入れるように混ぜてメレンゲに。しっかりと伸ばして角が立つまでと混ぜる。メレンゲができたら全部をしっかりと、メレンゲの気泡を潰さないようにしっかりと、滑らかに混ぜて生地は完成。
次にホイップクリームを作ろうと冷蔵庫から生クリームを取り出した所で階段を下りる音が聞こえた。
妹が起きてきたのだと分かり、挨拶をする。
「おはようございます。ケイト」
「ん～おはよ～。お姉ちゃん」
少し寝癖のついたセミロングの碧銀の髪に、黄色い星柄パジャマを着た一つ下の妹――ケイトはまだ寝ぼけているのか、たどたどしい声で挨拶をする。

私が朝食を作ってるのを見て、ケイトは訪ねる。
「お姉ちゃん、今日の朝ご飯ってなに？」
「今日の朝食はワッフルですよ」
「ワッフル！」
そう言うとケイトは目をぱちくりと開き、嬉しそうに瞳を輝かせる。
ケイトはワッフルや甘いものが大好きなのでうれしいみたいです。
「お姉ちゃん！　私も手伝う！」
「その前にちゃんと顔洗って着替えてきてください」
「はーい！」
ケイトはそのまま走って洗面所まで行く。
その様子をほほえましく見ながら、私は生クリームをカチャカチャと混ぜる。
「着替え終わった！」
「はやッ!?」
まだ一分も立っていないのにケイトが戻ってきました。
ケイトの姿を見ると、ちゃんと顔を洗って、寝癖もしっかりと梳き、服は赤いワンピースを着替えてと完璧だった。
「何手伝えばいい？」

両手を前に出してケイトは訪ねてくる。
「それじゃあ、この生クリームを角が立つまで混ぜてください。混ぜすぎるとクリームが固くなってしまうので気をつけてくださいね」
「わかった！」
私の持っていた生クリームの入ったボウルをケイトに渡すと、ケイトは勢いよく生クリームをかき混ぜる。
ケイトが生クリームを混ぜている間、私はワッフルに乗っける果物を切ることにする。サラダも兼ねているので多めに。イチゴ、バナナ、リンゴ、キウイフルーツ、と果物包丁で皮を剥いて、切り刻んでいるとケイトが話をかけてきた。
「お姉ちゃん、昨日汚染獣が来たんだよね？」
「はい。雌性体と幼生体が来て戦いましたよ。それがどうしたんですか？」
「汚染獣と戦った時のお話聞きたい！」
ピタリ、とリンゴの皮むきが止まる。……昨日の戦った時の話。
脳裏に昨日の戦闘がよみがえる。
『私の剉量は５３万です。ですがもちろんフルパワーで幼生体（あなた）と戦う気はありませんからご心配なく……』

『汚染獣、お前に足りないものは情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！　そしてェ何よりもーーーーーー速さが足りない!!』
『目標をセンターに入れてスイッチ、目標をセンターに入れてスイッチ、目標をセンターに入れてスイッチ』
『速攻剄技　バーサーカーソウル！　ドロー、モンスターカード！　ドロー、モンスターカード！　ドロー、モンスターカード！　ドロー、モンスターカード！』
……こんなの絶対おかしいよ。
「お、お姉ちゃんどうしたの!?　なんでそんな遠い目してるの!?」
「ううん。なんでもありませんよ。ああ、汚染獣と戦った時の話でしたね。あれは……」
「い、いいよ。辛いんだったら話さなくていいよお姉ちゃん！」
私は何も聞かない妹の優しさに涙を流し、その後、汚染獣の話題は出さずに黙々と調理しました。

完成したホイップクリームとフルーツの盛り合わせをお皿に乗せてから、ワッフルメーカーで焼いた焼き立てワッフルをお皿に乗っける。

「できたー！」
嬉しそうにケイトが言う。
ケイトの目の前にあるワッフルの上にはホイップクリーム、イチゴ、ブルーベリー、自家製イチゴピューレがかかってある。私のワッフルはバターとはちみつでシンプルに。焼き立てのワッフルのため、まだ熱く、上のホイップクリームとバターが少し溶けているのが食欲をそそる。
「それじゃあ」
「はい」
「「いただきまーす」」
ん？　今声が三人だったような……。
正面を見ると茶髪のサイドポニーの女性がケーキみたいにたくさんのフルーツとホイップクリームを乗っけたワッフルをナイフとフォークで美味しそうに食べていた。
「……なんでいるんですか師匠」
「ん？　あ、おはようアインハルト、ケイトちゃん」
「おはよーございますなのはさん」
ケイトが元気よく挨拶した人物――コルベニク最強武芸者、管理局の白い悪魔、もうグレンダン行ってきて天剣もらってこいよ、等の様々な異名を持つ我が師匠、高町な

のはがそこにいた。
　ケイトとお互いにトッピングしたワッフルを食べさせ合ったりしてる師匠にもう一度質問する。……仲いいですね二人とも。
「……おはようございます師匠。……でなんでここにいるんですか？」
「夜勤明けに朝ごはん作るの面倒臭かったからゴチになりに来ました！　あと、ついでにアインハルトに連絡を」
　師匠の答えに思わず嘆息。連絡はついでですか。
「はぁ、わかりました。それで連絡ってなんですか？」
「その前におかわり！」
「おかわりー」
　二人して空になった皿を出す。……私は無言で皿を受け取り、ワッフルメーカーに生地を入れて焼き始める。
「アインハルトー、私パリパリのキャラメルソースが掛かったバニラアイスを乗っけたワッフルが食べたーい」
「……アイスは冷蔵庫にあるんでご自由に。キャラメルソースは自分で作ってください」
「作ってよー。もっと師匠にやさしくしろー」

「殺剄まで使って不法侵入した人に朝食をふるまってるんですから十分やさしいですよ」

「ちぇー、アインハルトのけち」

そう言って、師匠は冷蔵庫からバニラアイスを取り出す。

ご自由にとは言いましたが、他人の家の冷蔵庫をためらいなく開けるその姿に思わず殴りたいと思った私は悪くないと思う。絶対に返り討ちに会うからやりませんが。

ちなみに師匠『魔法少女リリカルなのはＩＮＮＯＣＥＮＴ』でなのはが『とらいあんぐるハート３』の御神流習ってたから、という理由で御神流をマスターしたため、近接戦闘も超強い。

焼けたワッフルを二人に渡す。師匠はアイスを乗っけて、チョコソースをたっぷりとかける。どうやらキャラメルソースからチョコソースで妥協したようである。

ケイトも師匠の真似をしてアイスを乗っけて食べる。

笑顔でワッフルを食べる二人を見て、話は朝食を食べてからにしましょう。と思い私もバターとはちみつのかかったワッフルを食べる。

うん。外はカリッとしてて中はもちもちでバターとはちみつの甘さが引き立って美味しい。

私たちは最近あった師匠と私の修行で起きた出来事、ケイトの学校生活など、話に花

を咲かせながら楽しく朝食を過ごした。

朝食を済ませた後、ケイトを小学校に行かせ、私は朝食で使った食器と調理器具を洗っている。師匠もさすがにタダで朝食をもらって悪いと思ったのか手伝ってくれてる。

ちなみに私はすでに小学校は卒業している。

コルベニクでは小、中、高の卒業方法は二つある。一つは普通に小6年、中、高3年の教育課程をこなして卒業する方法。もう一つは卒業証明試験を受かって卒業する方法。大抵のコルベニクの武芸者（転生者）は後者で小学校を卒業する。前世の知識を利用して小学校一年の時点で卒業証明試験を受かり、吸収力のもっとも高い小学生から中学に上がる年齢――6歳から12歳までひたすら武芸に打ち込む。コルベニクの武芸者は比較的他の都市の武芸者よりも強いのはこれが原因の一つらしい。私やニャル子さん、念威操長（ルリさん）もこの方法で小学校を卒業している。

話を戻しますが、何故、すでに9歳で転生者であるケイトが未だ学校に通っているかと言うと、理由は簡単。ケイトは前世では11歳――小学五年生の時に死んだからで

ある。
　本人曰く、病気だったらしい。
　だからケイトは前世の記憶は小学五年生までのため、卒業証明試験を受けず、毎日学校に通っている。
　ケイトは前世の年齢も合わせれば２０年生きていますがケイトの時間は１１歳で止まっている。両親の変わりに私がしっかりと守ってあげないと……！
　改めて決意するのと同時に食器を洗い終わる。
　洗い物をして濡れた手を拭いていると師匠が先ほどの連絡について話始めた。
「アインハルトさっき言ってた連絡の事だけど、今日アインハルトの訓練見られないから」
「え、なんでですか？」
「今日の１０時から緊急会議で私も出ないといけないの」
「緊急会議……昨日の汚染獣戦に何かあったんですかね？」
「いや、汚染獣は関係ないってジョゼフ武芸総長が言ってたよ。それと代わりの先生を用意しといたよ」
　これ集合場所ね。そう言って渡された地図を見る。
「……すいません。集合場所が闘技場でも練武館でもなくテニスコートに見えるんです

が」

「間違ってないよ。今日の訓練の集合場所はテニスコートだよ」

「……アッハイ」

じゃあねー。ワッフル美味しかったよ。そう言って去ってゆく師匠。

何も言えず見送る私。

……テニスコート……嫌な予感しかしません！

どうもー。コルベニクの念威操長のホシノ・ルリです。私は今、第４練武館の大会議室にいます。会議内容は……。

「先ほど、グレンダンにいる我が同志から連絡があった。『鋼殻のレギオス』の主人公、レイフォン・アルセイフが天剣授受者になり、彼はレイフォン・ヴォルフシュテイン・アルセイフになったと」
「ついに原作が始まったか」
「ならば我々の計画も始動だ」
「そう……」

「「「「「ぼくのかんがえたさいきょう武芸者（転生者）をツェルニに送ろう計画を!!!」」」」」」

はぁ……昨日アインハルトさん言った通り、この都市の武芸者はみーんな、バカばっか。

第５話　テニスの覇王様１

「これより、１６名による第一回新人武芸者対抗、武芸テニヌ大会を始めまーす！」
ニャル子さんが宣言し、テニスコートからワーパチパチパチパチ――ッ！　と拍手の音。
……帰りたいです。
なんでいきなり、テニス大会が始まったかと言うと、師匠が頼んだという、特別講師平等院鳳凰さんがいるテニスコートへ向かったら、私以外にも十数人の武芸者がいた。
話を聞いてみると、彼らの師匠も全員、会議に出ていていないからので平等院さんが師匠代行するというので集まったようです。それで平等院さんが「テニヌ大会をやるぞッ！」と言うわけでテニス大会が開催してしまったのである。
「実況兼選手を務めるのはいつもニコニコあなたの隣に這い寄る混沌、ニャルラトホテプ、です！　そして」
『解説は私、電子の妖精こと念威操長ホシノ・ルリです。本日は会議のためテニスコートには来られず、代わりに念威端子越しで解説を行いたいと思います』
「いや、ちゃんと会議に参加しましょうよ!?」

私のツッコミになんでもないかのように――――昨日の汚染獣戦から仲良くなり名前で呼び合うようになった――――ルリさんが答える。
『念威操者に並列思考はお手の物です。現に私は今、複数の端子越しから会議、昨日、録画したアニメの視聴、ジャンプの閲読、十二面ルービックキューブを同時に行っています』
「念威操者すごッ!!」
ですが、全然尊敬できません。
私とルリさんの会話を見計らって、ニャル子さんがルール説明を始める。
「それでは、武芸テニヌのルールを説明しましょう！　基本ルールは通常のテニスと同じです。ですが、テニスラケットは使用せず、テニスラケットの代わりに自身の持つ錬金鋼を使用します」
「もうその時点でテニスじゃないですよね」
「だからテニスじゃなくてテニヌって言ってるじゃないですか、アインハルトちゃん」
テニヌっていえば許されると思わないでほしい。
「勝敗に関しましては相手より先に６ゲームを取る、または相手をＫＯするかで勝敗は決まります。ルールは以上です。何か質問はありますか？」
数人が手を上げて質問する。

槍を持った、幻惑剄技を得意とする赤い魔法少女訊く。
「相手への攻撃はどこまでありなんだ?」
「基本、テニヌボールに衝剄纏わせた攻撃なら大体大丈夫です。衝剄を放つとき、衝剄の中にボールがあれば有効ですし、散弾みたくボールの周りに剄弾でまき散らすこともありです。相手の攻撃に対し、迎撃で衝剄を放っても問題ありません。ボール越しじゃない直接攻撃は禁止、化練剄でボールを凍らせて脆くする等のテニヌボール自体を細工するのはルール違反とします」
『黒い悪魔』『カラヤ・アイン』などの異名を持つ、どう見てもパンツなズボンを穿くウィッチが訊く。
「銃弾でボールを打ち返すのは有効?」
「有効です。銃を武器にする人は銃弾でボールを打ち返したり、衝剄で作った翼、拳で打ち返しても問題ありません」
ペルソナ使いの木刀を持った、メガネを掛けた番長が訊く。
「原作『テニスの王子様』で行っていた二刀流を始めとしたルール違反等の扱いはどうなりますか?」
「『テニスの王子様』でやっていたルール違反、技の再現は全て使用オッケーとします」
その後もニャル子さんは転生者からの質問に答え続ける。

そして疑問、質問が終わり、始まる新人武芸者対抗テニス大会。第一試合は私。
当然やる気は起きません。……まぁ、適当にやって負けましょう。
そう考えているとルリさんが言った。
『そうそうアインハルトさん、なのはさんから伝言です。「負けたら７２時間都市外組手ね♪」と』
「やるからにはやっぱり優勝を目指しましょう！」
一転。全力で勝つことにします。
７２時間都市外組手。
それは長期汚染獣戦闘を想定した訓練のことだ。文字通り三日間、触れただけで皮膚を焼く汚染物質に満ち、傷一つで死に繋がる都市外で組手を行う。食事をしながら組手、錬金鋼が壊れても素手で組手、都市外戦装備が傷ついても応急スプレーで応急処置しながら組手、というまさに命がけの狂った訓練である。
死なないためにも、絶対に負けられません……！
そう決意してテニスコートに立つ。
相手は右目部分に∞マークの仮面を着けた剣を持ち、４０枚のカードを差し込んであるバイクに乗っている男。……バイク？
「……バイクって反則じゃないんですか？」

私の疑問にニャル子さんが答える。
「あれは武芸者専用の剄で動くバイク――――D（錬金鋼（ダイト））ホイールです。Dホイールは錬金鋼ですので問題ありませんよ」
「アッハイ」
もうこの時点で超帰りたくなりました。
だが、そんなことは関係ないとばかりにニャル子さんが試合開始の宣言をする。
「ではイリアステル三皇帝の下っ端プラシド対覇王イングヴァルトの末裔アインハルト・ストラトスの試合を開始します」
「俺は下っ端じゃない！」
「その呼び名恥ずかしいからやめてください！」
なんか最初からぐだぐだでした。
気を取り直してしっかりと相手を見る。
そして試合が始まる。
「ザ・ベストオブ1セットマッチ・プラシド、サービスプレイ」
「行くぞ！　俺のターン！」
プラシドさんが勢いよくデッキからカードを引く。
いや、俺のターンじゃなくてサーブしましょうよ。

「俺は手札から機皇兵ワイゼルアインを召喚！」
　錬金鋼の記憶復元による形質変化により、プラシドさんの持つカード型錬金鋼が白い機械人形――ワイゼルアインに変化し、姿を現す。
「プラシド選手、サーブ前にワイゼルアインを召喚した――！　あれ、どうやって動かしているんでしょうか？　解説のルリさん」
『あれはグレンダンの名門ルッケンス流の剄技、流滴を応用した技です。剄を糸状に化錬変化させた剄糸（けいし）を使ってマリオネットのように操作しています。主にスタンド使い、ペルソナ使い、デュエリスト、ファイターたちが良く使う戦闘方法ですね』
　早速ニャル子さんたちが実況、解説を始める。
　その間、プラシドさんはまだサーブをしません。
「俺はさらに永続魔法、機甲部隊（マシンナーズ・フロントライン）の前線基地を発動し、カードを二枚伏せる。これがデュエルならこのままターンエンド宣言するが、これは武芸テニヌ！１ターン目から攻撃宣言ができる！　行け、ワイゼルアインで攻撃！」
　プラシドさんが器用にワイゼルアインを鋼糸で操り、サーブを放ち、私の真横に飛ぶ。
「１５―０！」
　……はっ！　目の前の光景のアホらしさ思わずフリーズしてしまいました。
　バシン！　と両手で顔を叩き目を覚ます。

負けたら地獄の特訓が待っている。負けないよう、しっかりしないと……！

二球目の、ワイゼルワインが打ってきたサーブを今度はきっちりと掌底で打ち返す。

「ほう、打ち返すか。ならばこれでどうだ！」

プラシドさんがボールに向かってバイクを超加速しながら、打ちだした衝剄と同時にワイゼルアインがボールを返す。

先ほどのサーブよりも速い打球……ですが。

「師匠の剄弾の方が速いですよ！」

打ち出された衝剄とボールを私の剄で包みこみ、そのまま投げ返す！

ベルカ古流武術覇王流（カイザーアーツ）　旋の型　旋衝破

私の投げたボールはプラシドさんの横をすり抜け、コーナーぎりぎりのところに入る。

「１５―１５！」

「バカな、俺の剄（フィール）を吸収して投げ返しただと!?」

プラシドさんが驚き、今の一撃に実況席も騒ぎ出す。

「アインハルト選手お返しとばかりに旋衝破でポイントを返した―！　……しかし、今のボール掴んでましたけどルール的に大丈夫なんですかね？　ルリさん」

『いえ、アインハルト選手はボールは掴んでいませんよ。アインハルト選手は剄を布状

に展開してボールの勢いを逃さず相手に受け流して打ち返しました』
「なるほど。分かりやすく言うとバンジーガムでボールを包んで勢いを殺さずに投げ返したといことですか？」
『そんな感じです』
プラシドさんは私を睨みながら再びサーブの体勢に入る。
「たかが曲芸でオレに勝てると思うな！」
「いや、あなたの方が曲芸やってますよ」
そして始まるラリーの応酬。
プラシドさんは前にワイゼルアイン、後ろにワイゼルアインを操るプラシドさん、というダブルス陣形で守備範囲がかなり広い。
しかし、私は守備範囲をカバーできないスピードでボールを放ち続ける。
先ほどの旋衝破で流れを掴んだこともあり、プラシドさんからポイントを取る。……
そして。
「はぁッ！」
「クッ！」
「ゲーム１―０　アインハルトリード！」
脚甲でボールを蹴り、コートに叩き込む。

「最初の1ゲームを選手したのはアインハルト選手！」
『さらに次はアインハルト選手からのサーブ。流れは完全にアインハルト選手に来てますね』
まずは1ゲーム先取。そして私からのサーブ。……一気に決めます！
ボールを上に投げ、剄を収束した手甲でボールに手刀を振り下ろす。
「覇王……断空拳！」
「15―0！」
覇王断空拳によって放たれたボールがプラシドさんとワイゼルアインの間に通過する。
それを見てニャル子さんが言う。
「アインハルト選手の覇王断空サーブにプラシド選手反応できない！」
「勝手に技名つけないでください！」
しかもなんかダサいですし。
プラシドさんは私のサーブに届かず、30―0、40―0と得点を重ねる。
そして、止めとばかりにワイゼルアインに向かってサーブを放つ。
ワイゼルアインはボールを両手で打ち返そうとするが、覇王断空拳からなるボールにワイゼルアインの体が耐え切れず、両手が粉々に粉砕されながら吹き飛ぶ。

「ゲーム２―０アインハルトリード！」

「……ワイゼルアインが破壊されたことによって、永続魔法、機甲部隊の最前線（マシンナーズ・フロントライン）の効果発動。機械族モンスターが戦闘で破壊された時、破壊されたモンスターよりも攻撃力が低い、同じ機械族、同じ属性のモンスターを一体特殊召喚する。俺はデッキから攻撃力０、闇属性、機械族のワイズコアを守備表示で特殊召喚」

プラシドさんはデッキから出したカード型錬金鋼を取り出し、その錬金鋼を記憶復元させ、白い機械の卵みたいなものがプラシドさんの目の前に出現する。

そして、再びプラシドさんにサーブが移る。

「噂には聞いていたが予想以上にやるようだな。遊びはここまでだ。アインハルト、俺の本当の力を見せてやる」

そう言うとプラシドさんはＤホイールから立ち上がり、腰に挿していた剣をＤホイールに突き刺す。

瞬間、プラシドさんの剄が強く煌めく。

……来る！

どんなサーブが来ても対処できるように体全体に力を籠める。

そして、プラシドさんの剄の輝きが弱くなり姿を現したのは――

「……は？」

思わず素っ頓狂な声を上げる。なぜならプラシドさんの姿が……。

「な、なんとー!? プラシド選手、Dホイールと合体したー!?」

ニャル子さんが言った通り、プラシドさんの下半身とDホイールが一体化して合体していた。

……なぁにこれぇ。

ルリさんが解説する。

『人馬一体ならぬ。人機一体。Dホイールの究極進化形態。プラシド選手のこの大会にかける思いを感じますね』

プラシドさんが私に向かって指をさす。

「さぁ、第二ラウンドの開幕だ!」

第６話　テニスの覇王様２

Ｄホイールと合体したプラシドさんがカードを引く。
「俺のターン！　ドロー！」
だから、サーブしましょうよ。
「俺は手札から魔法カード、カオス・ブラストを発動！　デッキの上から３枚カードを墓地に送り、フィールドに存在するレベル４以下のモンスターを破壊する。俺はワイズコアを破壊！」
プラシドさんの前に浮かんでいた機械の卵――――ワイズコアが爆発した。
……その演出必要なんですか？
「ワイズコアが効果によって破壊された時、デッキ、手札、墓地から機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）、ワイゼルＴ（トップ）、ワイゼルＡ（アタック）、ワイゼルＧ（ガード）、ワイゼルＣ（キャリア）を特殊召喚する！」
プラシドさんが五枚のカード型錬金鋼を復元化させて、∞の形が描かれた球体、ヘビ、ウサギ、カタツムリ、トリの形をした白銀錬金鋼で出来た機械が現れる。
「そして機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）の効果発動！　合体せよ、機皇帝ワイゼル！」
プラシドさんがそう叫ぶと、∞を形が描かれた球体を胴体とし、ヘビが頭、ウサギが

右腕、カタツムリが左腕、トリが下半身と変形し、5メルトルを超える白銀の巨大ロボットに合体した。

これには実況席のニャル子さんも騒ぎ出す。

「プラシド選手一ターンで五体のモンスターを召喚し、さらにそのモンスターが合体したー!?」

ワースゴイナーもんすたーガガッタイシタヨー。……なんだこれ。

ワイゼル∞（インフィニティ）を合体させて準備が整ったのかようやく、プラシドさんがサーブに入る・

「ワイゼル∞（インフィニティ）で攻撃！　ワイズスロータースラッシュ！」

プラシドさんが器用に鋼糸で機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を操って、ボールを打ち出す。

先ほどのワイゼルアインが打ち出すボールよりも速いボールですが、打ち返せないボールではない。

だが、ボールを打ち返す瞬間、気が付いた。

――機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）がデカすぎて打ち返せる場所がない!?

先ほども言った通り、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）の全長は約5メルトル。そんな巨大ロボットがネット際に立たれては打ち返せる場所なんてライン近くの所しかない。

それでもワイゼル∞（インフィニティ）の届かないライン際を狙うも、とっさの判断のためかアウト

コースにボールが入ってしまう。
「アウト！　０―１５！」
「くっ、入りませんでしたか」
「さぁ、反撃の開始だ」
プラシドさんがそう言うと、再びサーブを打ち、ラリーが始まる。
ワイゼルの守備範囲が広すぎてまともにやっても相手コートには入らない。壁打ちをやっている気分だ。
打ちあげても後ろにいるプラシドさんがＤホイールで打ち返すでしょうから、おそらくロブも意味がない。……ならば。
「覇王……断空拳！」
覇王断空拳の加速を乗せたボールを機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）の胴体部分に目掛けて放つ。
ワイゼル∞（インフィニティ）が全てのボールを打ち返すなら機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を破壊するまで！
しかし、プラシドさんはこの攻撃に対して不敵な笑みを浮かべる。
「アインハルト、お前がワイゼル∞（インフィニティ）を直接狙うことは読んでいたぞ！　罠カード発動！　ワイズＧ３！　ワイゼルＧ（ガード）をリリースして手札のワイゼルＧ（ガードスリー）３を特殊召喚す

る！」

プラシドさんが叫ぶと機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）の左腕――ワイゼルG（ガード）を復元前に戻し、ワイゼルG（ガード）とは少し形の違う別の左腕が取り付けられた。

新たに着けられた左腕が剄の障壁を展開し、胴体のワイゼル∞（インフィニティ）を守るように構える。

腕を変えたとしても私の攻撃は防げません！

しかし、私の予想とは裏腹にボールはワイゼルG（ガードスリー）3を貫けず、ドロップショットの要領で私のコートのネット際に落ちる。

「なッ!?」

「ワイゼルG（ガードスリー）3は攻撃対象を自身に変えることができ、さらに一ターンに一度戦闘では破壊されない」

今の一撃でワイゼルを破壊できなかったことに私は驚愕し、実況席も騒ぎ出す。

「まさか、アインハルト選手の必殺技覇王断空拳によるショットが弾かれたー!? 先ほどのワイゼルアインでは破壊できたのになぜ、ワイゼルG（ガードスリー）3は破壊できなかったんでしょうか？ 解説のルリさん」

『ワイゼル∞（インフィニティ）の左腕――ワイゼルG（ガードスリー）3をよく見てください。あれだけ、黒鋼錬金鋼をベースに作られています』

ワイゼルＧ３（ガードスリー）をよく見てみると、確かに他は白銀錬金鋼で構成されているというのにワイゼルＧ３（ガードスリー）だけ黒鋼錬金鋼で出来ていた。同時に何故先ほどの一撃で破壊できなかったのか理解し、ルリさんが説明する。

『黒鋼錬金鋼は錬金鋼の中で最も耐久度の高い錬金鋼です。そこに剄で作った障壁を加えることによって強固な盾となり、アインハルト選手の覇王断空拳によるショットを防げたのでしょう。さらに伝導率の低い黒鋼錬金鋼で剄の盾を作ったことから、プラシド選手の技量の高さが伺えます』

ルリさんの言う通り、黒鋼錬金であれだけの剄の障壁を作れるプラシドさんの技量が相当なもの。

戦い方はふざけてますが……この人強い!!

「少々暴れさせてもらうぞ！　俺のターン、ドロー！」

やっていることはアホですけどね！

状況はこちらが不利。ワイゼル∞（インフィニティ）をなんとかしない限り勝機はありません。

とはいえ、この武芸テニヌルールでは拳で直接殴ることはできず、搦め手なども使えない。

やれることは正面突破のみ！

「はぁ！」

勢いよく、ボールを返すと同時に空破断を放つ。
空破断の衝剄でワイゼルＧ３（ガードスリー）は左に弾かれ、ボールによる攻撃でワイゼルＧ３は大きく左にそれる。
よし、左側が開いた。今なら相手コート入る――――
「罠カード発動！　ボム・ブラスト！」
「ちょ!?」
流石にこれには驚愕しました。だって目の前にいるワイゼル∞（インフィニティ）の頭部――――ワイゼルＴ（トップ）と下半身――――ワイゼルＣ（キャリア）が私目掛けて飛んできたんですから。
勢いよく右に避ける。
同時にワイゼルＴ（トップ）とワイゼルＣ（キャリア）が爆発。爆風に巻き込まれながらも受け身を取り、すぐさま立ち上がる。
「０―４０！」
なんでもないかのように審判がポイント宣言をする。
当然、私は怒ってプラシドさんに文句を言う。
「今の避けなかったら大怪我じゃすみませんでしたよ！」
「ボム・ブラストはこのターン戦闘を行っていないモンスター三体まで選択し、選択したモンスターを破壊することによって破壊したモンスターのレベル×４００ポイントの

ダメージを与える。俺は自分フィールドのレベル１ワイゼルＴ（トップ）、レベル１ワイゼルＣ（キャリア）を射出することによって貴様に８００ポイントのダメージを与えた」

おいこら、無視すんなや。ちゃんと会話のキャッチボールをしてください。

そんなこと関係ないとばかりにプラシドさんのサーブに移る。

「俺のターン！　俺はカードを一枚伏せ、グランエルＴ（トップ）を召喚。そして魔法カード、オーロラ・ドロー！　自分フィールド上に機皇帝が存在し、手札のカードがこれのみの時、デッキからカード２枚ドロー！　さらに貪欲な壺を発動！　墓地のモンスター五体をデッキに戻すことによって二枚ドロー！」

ワイゼル∞（インフィニティ）に新たな頭が着けられ、実況席の二人が騒ぎ出す

「おおっと、ここでプラシド選手怒涛の４枚ドロー！」

『最早、テニヌしているのかデュエルしているのか武芸しているのかわかりませんね』

ほんと、何なんでしょうね、これ。

プラシドさんはまだサーブ（バトルフェイズ）に入らずメインフェイズのまま、カードを展開して行く。

「手札から速攻魔法！　速攻召喚！　このカードは手札のモンスター一体を通常召喚できる。俺は手札のスキエルＣ（キャリアスリー）３を召喚。そしてスキエルＣ（キャリアスリー）３をリリースしてスキエルＣ（キャリアファイブ）５を特殊召喚！」

「プラシド選手、ボム・ブラストで失った機皇帝のパーツをわずか一ターンで新たな機皇

帝パーツに換装しましたね」

『はい。素晴らしいデュエルタクティクスです。機皇帝はパーツを変えることで強くなるモンスター。新たに着けられたグランエルT（トップ）はバトルフェイズ中に相手モンスターの効果を無効化、スキエルC（キャリアファイブ）5は一ターンに一度、戦闘を無効にする効果を持っており、まさに鉄壁の布陣。アインハルト選手絶体絶命のピンチですね』

見ているだけなら馬鹿らしい光景ですけど、ルリさんの言ってることが本当なら状況はかなりまずい。

縦長のモノアイ顔のグランエルTには収束率の高い碧石錬金鋼、人の字型ブースターの形をしたスキエルC（キャリアファイブ）5には伝導率の高いバランス型の青石錬金鋼が取り付けてあり、の二つを取り付けたワイゼル∞（インフィニティ）は剄を煌めかせる。先ほどのワイゼル∞よりも強烈な威圧感がある。

とはいえ、まだ得点では私の方が上ですし、総合能力も私の方が上。勝機は十分あります。

しかし、流れを完全に相手に取られ、先程の爆発によって自分コートがデコボコになり、イレギュラーバウンドの連発によって私は窮地に立たされてしまった。

「ワイゼルＡ５（アタックファイブ）の効果発動！　守備表示モンスターを攻撃した時、二倍の貫通ダメージを与える！」
「……ぐッ！」
　斬撃武器として最も細かい調整の利く鋼鉄錬金鋼で出来たワイゼルＡ５の斬剄を金剛剄で弾くも、ボールは返せず、自分コートに入る。
　審判が宣言する。
「２―３！」
　それにより、ニャル子さんが言う。
「プラシド選手ついに逆転！　アインハルト選手、機皇帝ワイゼル∞に手も足も出ません！　アインハルト選手は先ほどのサーブ時に化練剄でコートを修復して、イレギュラーバウンドはなくしましたが、機皇帝ワイゼル∞の鉄壁の防御を崩せず、このまま一方的にやられてしまうのかー!?」
　ニャル子さんの実況に気分を良くしたのかプラシドさんが言う。
「機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を出して１ゲームはおろか、一回も俺のコートにボールを落とせていない。サレンダーしたらどうだ？」
　その提案に真っ向から否定する。

「降参はしません。……それに、ようやく機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を倒す準備が整いました」

その言葉にプラシドさんは気付く。

「ほう、先程の化練剄でコートを戻すのと同時に伏剄を伏せていたか」

伏剄。外側に伏せた剄を一気に解放することにより、通常以上の剄力の技を放つ化練剄の奥義。

プラシドさんの言う通り、化練剄でコートを戻すついでに、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）に苦戦しているふりをしながら九もの伏剄を伏せていた。

プラシドさんが笑う。

「機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を倒すか……俺好みの答えだ。こい、アインハルト！」

「勝負です！」

一つ目の伏剄を解放し拳撃と衝剄を加えたサーブ放つ。

ベルカ古流武術覇王流　覇王空破断

その威力は覇王断空拳のショットよりも威力があり、強くて速い、剄の弾丸。

プラシドさんはこの攻撃に対し、余裕を持って対応する。

「スキエル C（キャリアファイブ）５のモンスター効果発動！　一ターンに一度、戦闘を無効にする！」

機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）の下半身がグルンと１８０度回転し、加速に使われた噴射口を

空破断に向けて剄の噴射で迎撃するが、空破断の衝剄の威力は殺し切れず、噴射口の一部に直撃し、機皇帝ワイゼル　∞（インフィニティ）の下半身が煙を上げる。

ワイゼルの右腕――ワイゼル　Ａ（アタックファイブ）５が斬剄を纏ったボールを返球する。

私はすぐさま、次の伏剄を解放。伏剄によって膨れ上がった自身の剄で斬剄を包みボールを投げ返す。

ベルカ古流武術覇王流　旋の型　旋衝破

「ワイゼル　Ｇ（ガードスリー）３の効果発動！　攻撃対象をワイゼル　Ｇ（ガードスリー）３に変更！　そしてワイゼル　Ｇ（ガードスリー）３は１ターン１度戦闘では破壊されない！」

ワイゼルの左手が衝剄の障壁を作るが、相手の斬剄と伏剄で大幅強化された一撃によって、ワイゼルＧ３に罅が入る。

返ってきたボールを伏剄を加えた光線のような剄の砲弾で打ち返す。

格闘戦技聖王流　セイクリッド・ブレイザー（ストライクアーツ）

「なに!?　高町ヴィヴィオの技だと!?」

ワイゼル　∞（インフィニティ）の左腕はボールだけは打ち返すも、セイクリッド・ブレイザーを直撃し、ワイゼル　Ｇ（ガードスリー）３は後ろフェンスに突き刺さる。

四つ目の伏剄をボールと共に雷と炎、二つの化練変化で作り上げた二龍を機皇帝ワイゼル　∞（インフィニティ）に放つ。

春光拳　双破龍神翔

「永続罠発動！　分岐―ディヴァジェンス！　このカードは自分フィールドの機械族モンスターが攻撃される時、対象を別の機械族モンスターに変更できる！　攻撃対象を機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）からスキエルC（キャリアファイブ）5に変更！」

機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）は雷と炎、二つの龍の咢によって下半身が消し炭になりながらもライン際にボール返球。

走ってボールに向かいながら伏剄を解放。中国拳法で言う鉄山靠でボールを打ち返す。

ベルカ古流武術覇王流　牙山の型　崩天輪

「スキエルC（キャリアファイブ）5が破壊されたことにより、機甲部隊（マシンナーズ・フロントライン）の前線基地の効果で、デッキからスキエルG（ガード）を特殊召喚！　そしてスキエルG（ガード）の効果発動！　1ターンに1度、自分モンスターが攻撃対象された時、その攻撃を無効にすることができる！」

プラシドさんは、すぐさま新たな機皇帝の左腕パーツを取り付けるも、まだ錬金鋼に剄が浸透しきっていないのかボールの威力を相殺しきれず、大きく左にそれる。

六つ目の伏剄を解放し、碧石錬金鋼の脚甲が煌めき、集束砲の蹴打でボールを飛ばす。

格闘戦技八神家流　抜剣　星煌刃

「分岐―ディヴァジェンスの効果で対象をスキエルG（ガード）に変更！」

ボールを打ち返すも星煌刃でスキエルＧ（ガード）は後ろフェンスまで吹っ飛ぶ。
手甲を獣爪のような手甲に形態変化させて、七つ目の伏剄解放。
ベルカ古流戦場格技エレミア流　ガイスト・クヴァール
「ワイゼル　Ａ（アタックファイブ）５に変更！　ぐぅッ！」
爪撃でワイゼル　Ａ（アタックファイブ）５の放つ斬剄ごと抉りとる。その威力は絶大的でワイゼル　Ａ（アタックファイブ）５は壊れるを通り越し、消滅する。その勢いでプラシドさんにダメージが入る。
そのまま、コーナーに入りポイントが入ると思いきや、プラシドさんがＤホイールによる衝剄で打ち返す。
私は地面を化練変化させ、剄を纏わせたボール目掛けて自身の腕に取り付けた化練変化した、土で出来た巨大なゴーレムの腕を回転させながら、ロケットパンチの要領で飛ばす。
創造戦技（マイストアーツ）　パージブラスト　ドリルクラッシャーパンチ
「グランエル　Ｔ（トップ）のモンスター効果！　１ターンに１度バトルフェイズのモンスター効果を無効！」
機皇帝ワイゼル　∞（インフィニティ）の頭部――――グランエルＴから放たれる剄の光線でドリルクラッシャーパンチを相殺される。
だが、ボールの威力は相殺しきれなかったのか、ボールはグランエルＴに当たり、グ

ランエルTが壊れる。
残りは胴体のみ！
残りの伏剄を全て解放し、全力でボールを胴体のみとなった機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）に飛ばす。
「覇王……断・空・拳!!」
ベルカ古流武術覇王流　覇王　断空拳
「バカな!?　この機皇帝が!?　この俺が!?　人間ごときに敗れるというのか!?　ぐ……うあああああああああああああああああああああああ!!!」
覇王断空拳によるショットで機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）は爆発し、それに巻き込まれたプラシドさんは合体したDホイールごと吹き飛ぶ。
地面を転がり、ボロボロとなったプラシドさんが試合続行不可能なのは見るからに明らかだった。
それにより、試合を見ていた実況、観客が、わあああああああああああああ!!　と沸く。
「アインハルト選手、機皇帝ワイゼル∞（インフィニティ）を倒し、逆転勝利ぃーーー！　一回戦目からすばらしい試合でしたね！」
『二人とも素晴らしい試合でした。次の試合も期待が高まりますね。なお、次の試合ですが、壊れたコートを化練剄の達人、鋼の錬金術師　エドワード・エルリックさんが修

理しますので数分お待ちください』

よろよろと、コートの外側に行き、ふう、と息を吐いて、フェンス越しに軽く座る。

プラシドさん……かなり強かったですが、まずは一回戦勝利です。

後ろから声が聞こえてきた。

「ふん、プラシドがやられたか」

「だが奴は俺らの中じゃ最弱」

「まったく、俺ら同期のいい面汚しだぜ」

後ろを振り向くと、そこには牡牛の兜を着けた黄金聖衣を着込んだ男、死覇装を着込んだ白髪の小柄な男、頬に十字傷がある楽の文字が描かれた道着を来た男、三人が立って遠目からこちらを見て、四天王コピペを言っていた。

「……誰？」

私の疑問にいつの間にか隣に立っていた、ニャル子さんが答える。

「右から牡牛座の黄金聖闘士のアルデバランさん、護廷十三隊十番隊隊長の日番谷冬獅郎さん、狼牙風風拳の使い手ヤムチャさんです。プラシドさんも入れて、彼らはコルベニクかませ四天王と呼ばれています」

「……」

コートの修復が終わったのか、ルリさんがアナウンスを流し、第二試合が始まる。

アルデバラン対羽咲綾乃

「コートにボールを通り抜けることは許さん！　この牡牛座のアルデバランがな！」

「あっ……一番バカなことした」

鉄壁の守備を見せたアルデバランさんでしたが、綾乃さんのラスボスじみた威圧感に気圧された隙をつかれてテニヌボールとバトミントンの羽が直撃して吹っ飛ばされて綾乃さんのＫＯ勝利。

日番谷冬獅郎対ふ○っしー

「倍返しなっしー！」

「なん……だと……!?」

梨妖精ふな○しーの俊敏な動きに対応できず、ふな○しーの勝利。

ヤムチャ対真田弦一郎

「きえろふっとばされんうちにな」

「貴様らルール通りにテニスをやらんかぁーーー!!」

真正面からのテニスで真田さん圧勝。
こうしてコルベニクかませ四天王は期待を裏切らず、全員一回戦で敗退しました。
……ほんと、何しに来たんでしょうこいつら。

第7話　テニスの覇王様3

一回戦が終わり、その後も打球や選手が分身したり、テニスなのに何故か空中戦を繰り広げたり、番長がマーラ様を出したり、変態仮面が大暴れしたりと大惨事が起きたりしましたが、なんとか大会は進んで行きました。

私も某邪王真眼の中二病との激戦を繰り広げたり（右目からビーム――もとい衝剄を連発した結果、失明したためドクターストップを食らい勝利）、天衣無縫の極みに達した某梨妖精のナマモノに梨汁を顔面にぶっかけられたり（師匠直伝のスターライトブレイカーで焼き梨に変えました）しながらも、二回戦、準決勝を勝ち、新人武芸者対抗テニヌ大会決勝戦。

その相手は……。

「沈没する恐怖に震えながら航海するがいい」

白いジャージを着込み、金色の長髪に貫録のある無精髭。聖人のような雰囲気でありながら、同時に獣の王者のような佇まいを持つ男。

テニス界の覇王、平等院鳳凰。

……。

「……新人？」
「俺はまだ１５だ」
「原作よりも若い!?」
今一度平等院さんを見る。
……うん。一言でいえば、白髪から金髪に変えた某不治の病に侵された「命は投げ捨てるもの」でお馴染みの北斗４兄弟の次男。
どう若く見ても３０代にしか見えません。
というか、１５でその髭ってどんだけ老け顔なんですか。
「ザ・ベストオブ１セットマッチ・平等院鳳凰、トゥ・サーブ！」
審判が宣言し、平等院さんがボールを宙に飛ばす。
「見せてやる。世界の広さを……技を！　Ｅｌ（エル）　ｔｏｒｅｏ（トレオ）　ｄｅ（デ）　ｅｓｐａ▪ｏｌ（エスパニョール）！」
外力系衝系の変化　Ｅｌ（エル）　ｔｏｒｅｏ（トレオ）　ｄｅ（デ）　ｅｓｐａ▪ｏｌ（エスパニョール）
トゥギュウという異音を鳴らしながらボールが飛ぶ。
その名の通り、スペインの闘牛を思わせる打球。速度、回転からプラシドさんを始めとした、今まで戦って来た人たちが放ったサーブとはレベルが違うと分かる。……ですが。

「打ち返せないというわけではありません……！」

覇王断空拳で強烈なストロークで打ち返す。

……ッ！　予想以上に重い打球のせいか右腕がわずかに痺れる。

「散れ……！　Ｐｉｒａｔｅｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ａｍｅｒｉｃａｎ！」

外力系衝剄の化練変化　Ｐｉｒａｔｅｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ａｍｅｒｉｃａｎ

平等院が放ったスマッシュがボールが地面に叩き付けられ、バウンドしたボールが剄によって６つに分身して増えた。

ブーメランだと分かってますが、あんたらいい加減普通にテニスしましょうよっ！

と心で叫びながら、ボールの縫い目まで剄で作り上げている剄球のため、どれが本物かわからない。努力の方向性を５４０度間違ってる技ですね。

剄球とボールの見分けが付かないため、同時に放たれた球を超速度で一球、一球、腕、脚の四肢を使って打ち返す。

右手で一球目を、打ち返した勢いを利用して回し蹴りで二球目、片足でなのは師匠直伝、御神流　奥義之歩法　神速で迫りくるボールの数倍の速さ一歩分後ろに下がり、両手で三球目、四球目を平等院さん目掛けて殴り返す。

そして五球目を……というところで、ゾクリ、とまるで背後から剣が突き刺さるような冷たい殺気を感じた。

「……ッ！」
前転しながら正面から来るボール（衝到）を躱し、私の背後から来た何者からの右薙ぎを後ろ髪数本切られながら避けきる。
後ろを振り向く。
「……」
そこには海賊帽子をかぶり、手にはカトラスと呼ばれる舶刀を持つ骸骨の船長が佇んでいた。
「１５―０！」
「今、ボール関係なく攻撃してきましたよこの人！」
骸骨船長を指さしながら審判の声を遮るように大声で叫ぶ。
この骸骨船長は一回戦で戦ったプラシドさんみたいに剄糸で動かす錬金鋼で出来た人形。
そして、剄糸の先は平等院さんのテニスラケットに繋がっていた。
ボール越しじゃない直接攻撃。どう考えても反則です。
「アインハルトちゃん、それに関してですが問題ありませんよ」
実況席にいるニャル子さんが言う。
いや、どう考えても反則ですよね？

「確かに『ボール越しじゃない直接攻撃は禁止』と言いましたがこうも言いました。『原作『テニスの王子様』でやっていたルール違反、技の再現は全て使用オッケー』と」
『骸骨船長（スタンド）は原作、新テニスの王子様の平等院鳳凰がやっていたことなのでルール的に問題ありません』
「いやいやいや、あれあくまでイメージでしたよね」
「それも含めての原作再現なのでルール的に問題ありませんよ。納得しました？」
「問題ありまくりですし、全然納得いきませんよ！」
　と叫んだものの結局このまま試合続行。私は平等院さんと平等院さんのスタンドを同時に相手しなければならなくなりました。

骸骨船長（スタンド）から繰り出される袈裟切りを手甲で火花を散らしながら受け流し、突き蹴りを放つが、骸骨船長（スタンド）は軽芸師のような軽やかな動きで避けられる。

本当にこの海賊船長（スタンド）はやっかいです。本体は俊敏な動きで避けられ、繋がれた剄糸を何度か切りますが一瞬で平等院さんで繋ぎ直して動き出します。

私は正面から来るPirates of the American（パイレーツ・オブ・ジ・アメリカン）対処するため片足で跳び、地面に向かって拳を振り下ろす。

Pirates of the American（パイレーツ・オブ・ジ・アメリカン）によって6球に分身したボールがコートに叩き込まれる瞬間を狙い、化練剄で地面を隆起させて打ち返す。

ベルカ古流武術覇王流　破城槌

粉塵が舞いながらボールを相手コートに散弾のように飛び散る。

平等院さんが構え、腕が揺らめく。

「?????（ザ・スネーク・チャーマー・オブ・インディア）……?????（ザ・スネーク・チャーマー・オブ・インディア）！」

外力系衝剄の変化

全てのボールが打ち返され、ボールが6球から7球に増える。

「…………ッあああああああ!!」

再び繰り出される骸骨船長（スタンド）の斬撃を捌きながら、全身を使ってボールを全て打ち返

す。

「……あー、私、実況ですが……粉塵でコートが見えないのに加え、レベルが違い過ぎて何が起こってるのか全然わかりません。ルリさんは何が起こっているのかわかりますか？」

『身体能力が一般人の念威操者にわかるとでも』

「ですよねー」

『まぁ、肉眼では無理ですが、念威映像のデータ越しでなら、粉塵を無くし、動きは脳が高速で処理しますのでわかりますが』

「あ、わかるんですか。流石天剣クラスぱねぇ。で、どういう状況ですか？　解説のルリさん」

『今は互いに9球「１０球を抱いて眠れ！」……１０球のボールで打ちあっていますね。技量では平等院さんが上、剄量ではアインハルトさんが上で二人の総合能力に差はそれほどございませんが、武芸ではなくテニヌという、相手の土俵で戦っていることから平等院さんが勝っていますね』

「確かに3―1で平等院選手がリードしてますね。しかし、アインハルト選手がこのまま終わるとは思いません」

『そうですね。そろそろ試合が大きく動き始めるころでしょう』

ルリさんがそう言った直後、正面から１０球に増えたボール、背後から骸骨船長（スタンド）の凶刃が迫りくる。

「……フッ!!」

背後から来る突きを私は脇腹に挟み込んでカトラスをへし折る。

同時に裏拳で骸骨の眼球部分に指を入れて掴み上げ、そのまま１０球のボールを力のまま剄を込めた骸骨船長（スタンド）全て打ち返す。

結果、全力で剄を込めたのに加え、１０球のボールの剄球に耐え切れず、骸骨船長（スタンド）は砕け散った。

「ゲームアインハルト。ゲームカウント３―２」

ゲームカウントを一つ取り返し、実況席からうおおおおおおおお!と歓声が沸いた。

「骸骨船長（スタンド）を破壊し、このゲームを制しましたのアインハルト選手!」

『外力衝剄の変化　蝕壊でカトラスのみを破壊して、すぐさま錬金鋼で出来た骸骨船長（スタンド）のコントロールを奪い、武器に使う。流れるように素晴らしい動きでしたね』

「形勢逆転してアインハルトが一気に有利になりました!　平等院選手はこのピンチに、どうするのでしょうか!?」

『いえ、逆ですよ』

「……え?」

平等院さんの剄が天衣無縫の極みのように強く輝き出す。そこには自身の骸骨船長(スタンド)が破壊されたのに、問題なんてなさそうな表情をしていた。
「ふん。……大海原を小舟で漕ぎ出すかよ」
平等院さんがボールを持ち、構える
ルリさんが呟く。
『アインハルトさんは……平等院鳳凰の本当の海賊を目覚めさせてしまいました』
彼の左手が光輝く。そしてその光がボールに注がれ、サーブが放たれた。
「滅びよ……」
外力系衝剄の変化　光る球(デストラクション)
平等院さんが放った球に触れた瞬間、背後の壁は壊れ、私は観客席まで吹っ飛んだ。

「15―0！」

「あーっとアインハルトくんふっとばされたー！　ってアインハルト選手吹っ飛びましたけど大丈夫なんですか？」

『問題ないようですよ。ほら、観客席まで飛びましたが綺麗に着地したようですし』

念威端子で指さされる。

「……」

私は観客席にまで吹っ飛び、光る球（デストラクション）によって折れたしまった右腕を無理やり、曲げて整えて破いた服で止血、固定と応急措置しながら考える。

先ほどの一撃を正面から受け止める、受け流すことはできるでしょうが打ち返すのは難しいですね。何よりあの光る球（デストラクション）を正面から打ち返そうとしたのが失敗でした。

光る球（デストラクション）には内臓や剄路などの内部破壊を目的とした徹し剄と言われる技だった。

無論光る球（デストラクション）に触れた瞬間、徹し剄だと分かり防御したが、ボールの毛先すべてに凝縮された衝剄が込められた徹し剄に加え、師匠のディバインバスター並みの威力。その結果、完全に防御しきれずこの折れた右腕です。

折れたことに関しては大した問題はない。それこそ金剛剄で腕を固めて動かせばいいのだから。問題は内部ダメージ――軽く剄路が麻痺して右手首から上の感覚が軽くなくなっていることです。一時間もすれば回復する程度のダメージですがこの試合で完全に封じられました。元々両利きだとしても、片手を封じられたのは痛い。

それに加えて光る球（デストラクション）。伏剄で剄を増幅させた一撃なら打ち返せるでしょうが、連続で打たれたら打ち返すのは不可能。つまり攻略法を見いだせず軽く詰みに入っています。

どうしようかと思い、嘆息していると高校生くらいの丸メガネを着けた銀髪の少年に心配そうに声を掛けられた。

「君、大丈夫かい？」

言われて考える。元々この試合乗り気じゃありませんでしたし、右腕も折れていますからこのまま棄権してもいいんじゃないかと――

『――なのはさんからの伝言です「負けたら７２時間都市外組手ね♪」と』

……いえ、やっぱり死にたくないので最後まであきらめずに頑張りましょう！

「問題ありません」

隣の席にいる少年に言い、軽くお辞儀してコートまで飛び降り、試合続行の意志を見せる

試合続行とわかり観客から声が沸き上がり、騒ぐ解説席の二人。

「アインハルト選手が戻ってきました！　光る球（デストラクション）を受けて右腕が折れて尚、アインハルト選手の闘志は全く消えていません！　しかし、何故平等院選手の打球があれほどまで威力が増したのでしょうか。今まで手加減していたんですかね？」

『いえ、そうではありません。平等院選手は先ほどまで世界の技と骸骨船長の操作の二つを同時に行っていました。そのため、全力の世界の技を打ち出せていませんでした。しかし、アインハルト選手によって骸骨船長（スタンド）が破壊されたことにより、平等院選手は骸骨船長（スタンド）に使っていた剄全てを世界の技に加えることができるようになりました。そのため、ボールに十全の剄を込められるようになり威力が増大したのです』

「なるほど、平等院選手の骸骨船長（スタンド）は武器の一つであり、一種のリミッターでもあったのですか」

二人の会話を耳に流しながら頭の中で作戦を立てる。どうやって勝つか。試合続行不可レベルの攻撃でＯＫを狙い？　いえ、直接殴るのならまだしも衝剄で平等院さんを倒すのは難しい。

自分自身の持てる技とこのテニヌのルール内で出来ることは……。

大会が開始される前にニャル子さんが言っていたルールを思い出す。基本はテニスのルール。剄を使ったものでボールを打ち返すのはいい。原作『テニスの王子様』の再現技ならルール違反でも使用可。

「あっ」

一つ思いつきました。

ですが、私にできるでしょうか……いえ、できなければ待つのは修行という名の死の

み。やるしかありません！

「レストレーション０２」

自身の錬金鋼の手甲をエレミアの鉄腕と呼ばれる獣爪型に形態変化させる。

右手が動かないので左手を前に構えて平等院さんを見つめる。

「ほう……立ち上がるか。それにいい気迫だ」

平等院さんが感心したかのように呟く。

「まだ死にたくありませんので」

「だが一切負ける気がしねぇ！」

平等院さんが叫び、再び光の球が放たれた。

迫りくる徹し剄の剄球を自身の剄で包み、旋衝破で投げ返そうとするが受け止めきれず、弾かれる。

「ゲーム平等院鳳凰　５―２」

「アインハルト選手、世界の技に圧倒され続け、ついに追い込まれました！　やはりはテニプリ最強キャラの一人、平等院選手強い！」

『このままいけば、平等院選手の優勝は確実でしょうね』

これまでの疲れと焦りで流れる嫌な汗をぬぐう。

私がまだ諦めていないのをわかってか、平等院さんの打球に一切の緩みはない。むしろさらに球のキレが増している。

今までの感覚を思い出すかのように左手首をクイッ、クイッ曲げる。

……ですが、何度も徹し剄に触れて大分感覚がわかってきました。ここでやるしかありません！

このゲームは私からのサーブ。左手でボールを宙に浮かせ、獣爪で切り裂くように左腕を振り下ろす。武芸者でなければ肉眼で視認することすら困難な打球。

しかし平等院さんは即座に反応し、ラケットで打ち返す。

「Ｅｌ　ｔｏｒｅｏ　ｄｅ　ｅｓｐａ▪ｏｌ！」（エル・トレオ・デ・エスパニョール）

迫りくる魔球。最初に放ったEl　torreo　de　espa▪olと違いこの打球は平等院さんの全力の一撃。
ボールが当たる直前を狙って左腕を振り上げる。
エレミアのガイスト・クヴァールのように鋭く、覇王流の旋衝破のようにすべての剄を包み込むように！
空間を削り取り、現れる漆黒の剄の壁。
El　torreo　de　espa▪olと漆黒の剄がぶつかり合う。
漆黒の剄がボールに纏う剄を侵食し、打球の威力を吸収するかのようにパリパリと雷を散らしながらボールの勢いが弱まる。
そして迫りくる、全てを蹴散らした猛牛は止まった。
すかさず、ボールを旋風脚で飛ばす。
「0―15」
平等院さんは驚愕して動きが泊まり、そのままボールがコートに入って審判が宣言。
会場全体がシン……と沈まりかえる。
ポツリ……と解説席の二人が呟く。
『今のは……』
「まさかッ……!?」

そう。

「ブラックホール」

外力系衝剄の化練変化　ブラックホール

その言葉を口に出した直後、会場全体がいままで以上の歓声の音が鳴り響いた。

『アインハルト選手の剄技にブラックホールを存在しません。つまり……』

「この土壇場でブラックホールを習得するとは……やはり天才か……！」

実況・解説席の二人がネタに走ってるのを無視して平等院さんを見つめる。

平等院さんが口を開く。

「この試合中にブラックホールを習得したというのは驚愕に値するだろう。だが、貴様のブラックホールはただの模倣。本物のブラックホールのように全ての球を防げるわけじゃない」

そう。平等院さんが言った通り、私が使ったブラックホールは原作の「徳川カズヤ」が使用した空間を削り取って全ての球を止める技「ブラックホール」を剄を使ってそれっぽく作った模倣。本物のブラックホールというわけではありません（というか実際に空間削ってもボール止まりませんし）。

では何の意味があるのかと言えば意味はある。

このテニヌ大会ルールで剄と錬金鋼がラケット変わりとして使用されている。そのため、衝剄を放ってボールの勢いを弱めた後、錬金鋼で打ち返すというのはテニスで言う二度打ちのため禁止。

ですが、ニャル子さんの言った『原作『テニスの王子様』でやっていたルール違反、技の再現は全て使用オッケー』言葉。つまりブラックホールでボールを止めて打ち返すという二度打ち行為は原作再現のため問題ないというわけだ。

要は言ったもの勝ちと言うわけです。

「……とはいえ、あの威力の球を触れず、衝剄のみで完全に防ぎきる技を作るはかなり大変でしたが」

ボソッと誰にも聞かれないくらいの小さな声呟く。

特に色とかも再現しないといけないため化練剄使って無理やり黒色にしましたし。

とはいえ、これで平等院さんの技を防げるようになりました。ここからが本番です。

「はぁ！」

手甲に剄を注ぎ、ボールに振り下ろす。

「羅針盤の位置元に戻っただけだ。まだ海嵐の航海は終わっちゃいねぇ！

????（フェアリング）??（オブ）????（エッグス）????？

????？

????？

????！」

外力系衝到の変化　??????????????????（ザ　フェニックス　オブ　エジプト）
ピィイーーーヒョロロロロロ！
ロブで打ち上げられた打球は高く宙を舞い、自身燃やしながら突撃する不死鳥の如く降り落ちる。
……どうやってあの擬音出しているんでしょうか？
と思いながらも真上にブラックホールを展開して止める。
そのまま左腕で放ったスマッシュが平等院さんのコートに落ちる。
「0―30」
このまま、勢いに乗って私は1ゲーム、2ゲームとゲームを制し、追い込んだ。
逆転して、ついに、マッチポイント。だというのに平等院さんの顔に焦りが一切浮かんでこない。……それはおそらくあの技を残しているためでしょうか。
ブラックホールでボールを防ぎ、拳でボールを殴る。
平等院さんのラケットに濃縮な到が注がれる。
「なるほど。名前だけの技じゃなさそうだな。アインハルト。俺は貴様のブラックホールを超え、俺は本物を超え、異次元の強さを手に入れる！
Pirates of the World（パイレーツ　オブ　ザ　ワールド）！」
外力系衝到の変化　Pirates of the World（パイレーツ　オブ　ザ　ワールド）

『平等院鳳凰』の必殺技と呼べるＰｉｒａｔｅｓ（パイレーツ） ｏｆ（オブ） ｔｈｅ（ザ） Ｗｏｒｌｄ（ワールド）右、左、正面、真上、後ろと３６０度から無限ともいえる球が迫りくる。

しかもその全てが徹し剄とそこら辺の武芸者が食らったら死、生き残ったとしてもと徹し剄によって剄脈を破壊しつくされて植物人間としての未来が待っているだろう。数分前の私だとしても防ぎきれず、数か月の入院を余儀なくされたでしょう。……ですが。

「今の私には効きません」

外力系衝剄の化錬変化　ブラックホール

漆黒の剄を私の周りに展開させ、全ての球を受け止める。

Ｐｉｒａｔｅｓ（パイレーツ） ｏｆ（オブ） ｔｈｅ（ザ） Ｗｏｒｌｄ（ワールド）で生み出された衝剄が消え、本物のボールが現れる。

相手の必殺技を破り、勝利を確信して剄の砲撃でボールを飛ばす。

外力系衝剄の変化　ディバインバスター

雄性体すらたやすく粉砕するであろう一撃。それを目の前にしても平等院さんの目は揺らいでいなかった。己の必殺技を防がれたというのに、剄の淀みは一切なくラケットにはむしろ先程よりも剄の密度が上がっていた。

まさか、まだ切り札があるというのですか!?

「俺は原作を！『平等院鳳凰』を超える！
Ｃｈｒｏｍｅ（クローム）　Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド）　Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）！」
外力系衝剄の変化　Ｃｈｒｏｍｅ（クローム）　Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド）　Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）
ディバインバスターが返され、放たれたのは巨大なボール。比喩などではなく、全長４メルトルは超すであろう規格外の衝剄。
大声で叫ぶ実況・解説席。
「平等院選手原作にはない世界の技を繰り出したー！」
『あれこそ、平等院さんが本物を超えるために生み出したこの世界の技であり最終奥義Ｃｈｒｏｍｅ（クローム）　Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド）　Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）です』
この衝剄を肌で感じた瞬間理解した。これはただのブラックホールじゃ防げないと。
……ならば！
左腕を振り上げてブラックホールを作り出し、振り上げた腕の力を利用して体をバック転して、振り上げた脚甲でブラックホールを作り出す。腕、脚を振り回してさらにブラックホールを三重、四重と作り上げる。
「ブラックホールの多重展開!?」
『アインハルト選手は避けず、迎撃するようですね。おそらく、この攻防で決着はつくでしょう』

そしてＣｈｒｏｍｅ（クローム） Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド） Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）とブラックホールがぶつかり合う。剄と剄のぶつかり合いで地面が飛び、暴風が生まれる。

「……ッツ！」

体重の軽い私が風で飛ばないように足で地面を突いて固定する。

ブラックホールが一枚、二枚とＣｈｒｏｍｅ（クローム） Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド） Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）によって剥がれていく。

……止めきれませんか!?

武芸者としての経験が多重展開したブラックホールでは防ぎきれないと感覚として理解した。

ブラックホールが盾となっている今なら後ろに下がって避ける。　ですが、もしここで避けきれなかったら右腕の怪我も考えて試合続行は難しい。

勝つためには迎撃しか方法はない。

最後のブラックホールが壊れた直後に一撃を入れる！

左腕を後ろに回して構える。

ブラックホールが全て破壊されるタイミングを見計らう。

……三枚、四枚。

最後のブラックホールに罅が入る。

……ッ今！

狙うは衝剄の中央、そこにあるボールの一点のみ。

ブラックホールが壊れると同時に左腕を前に突き出す。

ベルカ古式武術覇王流　覇王断空拳

自身が持つ一番信頼している剄技の衝剄がＣｈｒｏｍｅ（クローム）　Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド）　Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）向かって放たれる。

打ち勝つ必要はない。ボールだけを貫き相手コートに入れればいい。

「うあああああああああああああああああああぁぁぁっ！」

喉が潰れる程の咆哮を上げ、覇王断空拳に注ぎ込む剄量を上げる。

Ｃｈｒｏｍｅ（クローム）　Ｓｈｅｌｌｅｄ（シェルド）　Ｒｅｇｉｏｓ（レギオス）覇王断空拳がぶつかり合い、私自身傷だらけになりながらも剄を一切乱さず、放ち続ける。

会場全体が轟音と共に閃光に包まれた――――。

「互いの奥義のぶつかり合い、勝ったのはどっちだ!? 」

「――はっ!?」

一瞬、意識が飛びましたが、ニャル子さんの叫びで目を覚ます。

衝到のぶつかり合いで発生した大量の煙で何も見えない。煙の中からボール飛んできても反応できるよう耳を澄ませる。

身体は血だらけで服もボロボロで手甲も限界以上に注ぎ込んだため軽く融解していますが、まだ脚甲は残っていて戦えないわけじゃない。

ゆっくりと煙が晴れる。

視界が晴れて写ったのは私の立っている所を除いた自身のコート全体に大穴が空いて消滅したコート。

そして、ボールが直撃し、仰向けの倒れた平等院さん。

「ゲームセット　ウォンバイアインハルト６―７」
「テニス界の覇王　平等院選手を下したのはアインハルト選手だーーーー!!」

最後まで冷静にカウントしていた審判が宣言し、同時に歓声が沸く。
わああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！
その叫びにより勝ったのだと理解し、私は歓声の中、左腕を上げる。それによりさらに歓声が沸く。
今ハルにゃんの脇見えたぜ！　胸もちょっと見えたぜ！　バカな、十歳にしてすでに見える程の大きさだと!?　しかも汗だくだ！　脳内に百回保存したわ。ばっか、俺なんてすでに念威端子使って最高画質で保存して焼き増ししているぜ！　売ってくれ！十万までなら出す！　ハルにゃんの脇の汗ｐｒｐｒしたい。
……。

その後、胸を隠し、無茶苦茶涙目になりながら観客に襲い掛かりました。

もうやだこの都市！

幕間　八相会議

テニヌ大会でアインハルトが優勝した同時刻。第４練武館の大会議室に７人の武芸者……いや、転生者たちが円卓に座っていた。

八相（はっそう）。

再誕都市コルベニクでもっとも影響力の高い転生者に与えられる称号。ここにいる武芸者たちは実質転生者たちの頂点。

アインハルトが涙目になりながら観客たちを襲い掛かっている映像を見ながら、八相の一人――コルベニク武芸者を総べる武芸総長ジョゼフ・ジョースターは髭をなでながら呟く。

「ふむ……優勝候補とはいえ、平等院を破り彼女が優勝するとはの……」

いい意味で予想外じゃわい。と語るジョゼフに同調するのはコルベニク最強の武芸者高町なのは。

その間も観客にキン肉ドライバーを決めるアインハルト。

「うん。流石我が弟子！　まぁ、流石にブラックホールをやった時は驚いたけど」

にゃはは、と苦笑いを浮かべるなのは。

その間も観客にビックベンエッジを決めるアインハルト。
「わしら科学者も錬金鋼の戦闘データが取れて大満足じゃよ」
大量の研究データを手に入れ、満面の笑みを浮かべるのはコルベニクが誇る3賢人――もとい3バ科学者の一人阿笠博士。
その間も観客にマッスルインフェルノを決めるアインハルト。
「ミクダヨー」
世界的有名な武芸者アイドル初音ミク……は世界ツアーのため欠席しており、代わりに一分の一ミクダヨー人形が置かれていた。
その間も観客に真・マッスルインフェルノを決めるアインハルト。
「しかし、アインハルトがこれ以上暴れられると遊びじゃ済まなくなる。ホシノ、そろそろ止めさせろ」
暴走しているアインハルトを止めに入るのは、八相の良心（比較的）――都市警察、警視総監　夜神月。
とはいえ、アインハルトを煽った観客の約半数がすでに頭が地面に突き刺さる――俗に言う犬神家状態でまだ武芸者の遊びで済むあたり流石コルベニクと言うべきだろうか。
「了解です」

八相最年少の念威総長のホシノ・ルリはすぐさま念威端子越しにアインハルトをたしなめて救急車の手配をする。

そしてこの部屋にいる最後の八相――コルベニクのアミューズメント事業の４割を占める大企業　海馬コーポレーション社長　海馬瀬人が電話で部下に命令する。

「磯野。今すぐマインクラフター達をテニス会場に入れて会場を修理させろ」

『了解しました。海馬様』

数分後には救急車で怪我人が運ばれ、海馬コーポレーション所属のマインクラフター達によってテニス会場が元通りになった。

一通り大会の事後処理が終わったところでジョゼフがゴホン、と軽く息をする。

「そろそろ八相会議を始めたいと思うんじゃが……ルリくん。メルクリウスはまだ見つからんのか？」

水銀の蛇　メルクリウス。

残る最後の八相の一人で、武芸者の実力もさることながら都市戦、汚染獣戦では指揮官を務め、八相内では参謀役を担っている武芸者。

そのメルクリウスだが、現在行方不明でテニス大会が始まるあたりからルリに念威で探させていた。

都市全体から各建造物、果てには機関部内部まで探索した結果、ルリは困惑げに口を

開く。
「それなんですが……メルクリウスさんは現在この都市にいないことがわかりました」
「どういうことじゃ？」
「文字通り、この都市にメルクリウスさんはいません」
「というと、放浪バスで別都市にいるってこと？」
なのはの言にコクリと頷くルリ。
「それと……メルクリウスさんとラインハルトさんの自宅から学園都市マイアスの合格通知と入学書類が見つかりました」
学園都市マイアス。
原作、『鋼殻のレギオス』でツェルニが最後の一つとなった都市の動力源、セルニウム鉱山を賭けて最初に戦争する都市。
原作ではツェルニはマイアスに勝利していたが、仮にここでツェルニが負けるとツェルニは保有するセルニウム鉱山を全て失い、都市の動力源を失ったツェルニは動きを止めて滅びることになる。
そしてルリが語ったもう一人の人物。黄金の獣　ラインハルト・ハイドリヒ。
メルクリウスと同作品のＤｉｅｓ　ｉｒａｅの成り切り転生者（コスプレイヤー）で圧倒的カリスマ力と同年代の平等院鳳凰を上回る強さを持ち、次期八相候補とも知られる人物。

……たった二人で他都市を滅ぼせるほどの武芸者が原作の敵都市に入学する。

「「「「「……」」」」」

八相全員が事態のまずさに黙り込む。

「予想以上にまずいことになったのぉ」

「まずいなんてレベルじゃないの。ツェルニ滅びない？」

「老性体討伐経験者の二人ですからね。レイフォン一人だけじゃ確実に滅びますね」

「あの二人の事だからむしろ滅ぼそうとしているんじゃないか」

「ラインハルトのカリスマ性からいって一年で有象無象を総べ、原作までに凡骨くらいには鍛え上げるだろうな」

「原作までの五年間。絶対、聖槍十三騎士団とか作るじゃろうしな」

「ミクダヨー」

「「「「「……」」」」」

再び黙り込む八相たち……そして。

「「「「ま、いっか」」」」

ルリ以外の八相は考えるのをやめた。

同じ都市の同胞のせいで近い未来、都市一つ滅ぶかもしれない危機だというのにこの言いぐさである。

「いや、それでいいんですか？」
　とルリがつっこむが……。
「だってニートじゃし」
「働かないし」
「働いてもろくな事起こさないし」
「さらにコズミック変態だし」
「三回くらいムショに入れても全然反省しないし」
「ミクダヨー」
　八相内では最低評価なメリクリウスであった。
　しかし、ニートでコズミック変態とゴミクズな水銀だが、腐っても転生者たちを統べる八相の一人。
　ジョゼフ困ったように息を吐く。
「はぁー、とはいえ、八相の一人がいなくなるのはこちらも痛い。この中で新たな八相として推薦したいものはおるか？」
　ジョゼフの発言に真っ先に挙手するは海馬社長と高町なのは。
「俺はコンボイ司令官を推薦しよう。あいつの言う事の反対の事をやれば大体うまくいくからな」

「節穴芸を見たいから海野リハク！」
「却下じゃ」
　ジョゼフは二人の意見ににべもなく一蹴する。仮にこの二人が推薦したものが八相に入ったら「私にいい考えがある！」と言い作戦失敗して「読めなかったこのリハクの目をもってしても！」とかギャグかまして都市は確実に滅びるだろう。
　続いて阿笠博士が意見を出す。
「正田崇作品つながりで甘粕正彦などはどうじゃろうか」
「ミクダヨー……我がゆるキャラ連盟　盟主ガチャピン様」
「「「お前喋れたの!?」」」
　この後もワーワーギャーギャーと意見を出しては騒ぎ出す八相の四人と一匹のナマモノ。
　残りの二人の八相、ルリと月は頭を抱える。
「だめだこいつら……はやくなんとかしないと……」
「バカばっか」

三十分後。

「だいぶ話が脱線してしまったが今より八相会議を開始する」

ジョゼフの言葉に八相たちの顔が引き締まる。

「先ほども言ったが原作『鋼殻のレギオス』が始まり、我らの計画〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画〟を開始する」

ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画。

文字通り、原作時期にともない、再誕都市コルベニクから転生者をツェルニに送り込んで原作介入させるなんともアホな計画である。
「送り込む転生者はツェルニの小隊の人数に合わせて７人。　毎年一人、場合によっては二人、その年で優秀な武芸者をツェルニに向かわせることとする」
ジョゼフの言葉に真っ先に反対意見を出すは夜神月。
「僕は反対です。ただでさえメルクリウス、ラインハルトという優秀な武芸者二人がコルベニクを出て行って戦力低下したというのに、さらに優秀な武芸者を７人も他都市に放出するなんてことは」
「しかしのー、わしらが介入しなかったら確実に原作崩壊するぞ」
「あの二人の介入で原作の都市が滅ぶというなら所詮それまでの都市だったってことですよ。他都市を心配する前にまず、自都市の心配をするべきです」
「それにおそらくわしら以外に原作介入するものもいるぞ」
月の言葉を遮るように語るジョゼフ。
阿笠博士は疑問を口に出す。
「はて、この世界にコルベニク以外に転生者はいないはずじゃろ？」
「都市外転生者じゃよ」
「「「あー」」」

ジョセフの言葉にルリ以外の全員が納得の声を上げる。
「そうだった都市外転生者がいたね。あいつらなら原作介入しそう」
なのははいたいたそんな奴、といった感じに顔を手に当てて上を見上げる。
ルリはおずおずと、聞く。
「すみません。都市外転生者ってなんですか？　」
「あれ、ルリは知らないの？　都市外転生者ってのは」
「――この都市を出た転生者の事だ」
なのはの言葉を遮り、月は語る。
「知ってのとおり、この都市で産まれる武芸者はみな、前世の記憶がある転生者だ。数万を超える転生者の中には当然考えが合わないやつもいる――特に成り切りとかね。そういう者たちの何人かはこの都市を出て行く」
「？　それの何が問題なんですか？」
「問題なのは都市外で成り切りする転生者たちだ。比較的まともなのがラグーン商会や運び屋〝赤屍蔵人〟といった人たちで、問題は暁や幻影旅団と言った犯罪者たちだ」
「――ッ!!?」
暁に幻影旅団。某ジャンプ漫画でも有名な犯罪組織の名前にルリは驚愕する。例え成り切りでも、いや、成り切りだからこそ彼らの危険性に理解できた。

都市外にいるんですか？　というルリの言葉に月は頷く。
「他にも犯罪組織はいくつかあるけどこの二つは特に過激的でね、暁は廃貴族狩り、幻影旅団は天剣強奪未遂事件と軽く原作介入しているらしい」
なのはが思い出したかのように当時を語る。
「天剣強奪未遂事件の時は幻影旅団とコルベニクが繋がっていると勘違いしたグレンダンが報復として天剣授受者のトロイアットを差し向けて来たんだよねー。まぁ、天剣持ってきてなかったから一対一でフルボッコにして送り返したけど」
原作最強クラスをフルボッコってあんた何者だよ。とルリは叫びたい衝動に駆られたり、その話を詳しく聞きたかったが、一応重要な会議なので我慢した。
ちなみにこれが原因でなのはは同僚にたびたび「もうグレンダン行って天剣もらってこいよ」と言われるようになったのである。
「おそらく、原作開始時に暁と幻影旅団はツェルニに現れる可能性が高い。奴らを捕まえるためにもツェルニにはわしら転生者を送り込む必要があると思う」
ジョゼフの言葉に月は目を閉じて考える。
ジョゼフ武芸総長の言っていることはおそらく正しい。奴らは何せ、都市を出てまで成り切りをするアホたちだ。原作が始まったとなれば嬉々してツェルニに乗り込むだろう。

都市を守るものとして優秀な武芸者を外に出すのは反対だ。しかし、警視総監として同胞の犯罪者を無視しておけない。

十秒ほどしっかりと考えて月は決めた。

「……わかりました。ですが、送り込む転生者の中に一人は都市警所属の人物を入れてください」

ジョゼフはにやりと笑う。

「うむ。それではツェルニに送り込む転生者は7人でいいな？」

八相全員が頷く。

「そして、先程のテニス大会――もとい『原作介入させる転生者選定テニス大会』の結果から、優勝者のアインハルト・ストラトスを〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニ送ろう計画〟の要、再誕都市コルベニクの武芸全てを一人の転生者に極めさせる〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者育成計画〟に組み込むことが決まったが、誰か異論はあるか？」

ジョゼフの言葉にルリははい、と手を上げる。

「今更なんですが……なんでテニス大会で決めたんですか？」

その疑問になのはが答える。

「それは彼らの能力をしっかりと知るため。原作でもボールを使った特訓があるけど、

テニスは走り回るのに活剄、ボールを打つ時に衝剄といった基礎能力に加え、テニスに己の武芸をいかに組み込むかの応用性やとっさの判断力、武芸者のこれからの伸び代、潜在的能力もある程度わかるからね。

仮に純粋な武芸大会にしたら何人か瞬殺されてその人のポテンシャルとかわからなかっただろうし。でもテニスならゲームセットになるまで続くから一人一人のポテンシャルが良くわかるってことだよ」

「なんも考えてないように見えてちゃんと考えていたんですね。……でもＫＯで瞬殺された選手もいますが」

「ボール越しの衝剄で瞬殺されるような雑魚は論外に決まってる！」

叫ぶ海馬社長にあ、そうですかとルリは呟き、結局こいつら何も考えてないんじゃ……と思った。当然口には出さない。

「この〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者育成計画〟は近いうちにアインハルトを呼んで知らせる。それまでに各々は準備しておくように。それでは、今日の所はこれで解散じゃ」

ジョゼフが解散を宣言し、それぞれ立ち上がり退出して行く八相たち。

「さて、アインハルトに実戦経験を増やすために汚染獣と遭遇しやすいルートを走って

くれとコルベニクに交渉するかの」
「私もバーンパレスのみんなにアインハルトと組手させるように交渉しようかな」
「磯野！　バトルシティ計画の開始を急がせろ！　それと出場者の中にアインハルトを加えておけ」
「わしも急いで東くん、スカリエッティくんと共にアインハルトくんの新型錬金鋼の製作するとしよう」
「ミクダヨー」

「……とりあえずアインハルトのために今から胃薬買いに行こう」
「やっぱりこの都市の武芸者はバカばっか」

第８話　小学校がおかしいのはどう考えても転生者が悪い！

ゾクリ。

「――!?」

い、今何か悪寒が……。

「聞いているかい？　アインハルト君？」

「あ、すみません。ボーっとしてました」

テニス大会が終わり、私は折れた右腕の治療するために病院で診察を受けていた。

この都市で一番大きな病院なのだが……一般医師もいれば転生者医師もいる。一応全員腕はいいのですが、転生者には某蛇博士や車椅子に乗ったアラガミな黒幕博士の成り切りも普通に在籍しているため、病院でありながらこの都市で４番目くらいに危ない所でもある。

幸い、今回の担当医は大当たりでした。

カエル顔の医者――通称冥途返しが折れた右腕に剄脈治療の針を刺しながら嘆息する。

「ただでさえ昨日の汚染獣戦で怪我人が多いのにさらに怪我人を増やさないでほしいね。幸い全員軽い脳震盪だったけど、彼ら下手したら死んでたよ」
「ごめんなさい」
　最後に観客に襲い掛かったのは流石にやり過ぎたと思い、素直に謝る。
「謝るんなら、怪我人に言いなさい」
「あ、それは絶対嫌です」
「……」
　カエル顔の医者の言葉に速答で拒否する。
　あいつらに謝ったりしたら余計調子に乗りますし。
　私の言葉を聞いて深くため息を吐くカエル顔の医者。
「はぁ。……それと折れた右腕を無理やり直すのは感心しないね。おかげで剄路が少しずれているよ」
「ひょっとして完治が長引いたりしますか？」
　家事の事もありますから何日も右腕が使えないのはつらい。
　不安な顔をしていると、カエル顔の医者が針を抜き、包帯を巻きながら答える。
「それなら大丈夫だよ。君の活剄での治癒速度も考えれば折れた腕を含めて二日くらいで完治するよ」

思ったよりも速く完治することにほっとする。
「相変わらずこの世界の医療技術はすごいですね」
「腕とかも普通に再生治療できるからね……と、はい。ギプス巻き終わったよ」
ありがとうございます。と言って、包帯が巻き終わり、固定された右腕を軽く振る。
「わかっていると思うけど、次に病院に来るまで腕は動かさないように。あと、必要ないかもしれないけど痛み止めの薬を処方――」
「――先生！　急患です！」
カエル顔の医者の言葉を遮るように診察室の奥から看護師がやってきた。
急患と言う言葉にカエル顔の医者が真剣な顔つきに変わる。
「患者の容体は？」
「美樹さやかさんが『オクタヴィア』召喚練習で何度も腹部を剣で突き刺して重傷！　大量失血と一部臓器に剣が刺さり非常に危険な状態です！」
ガン！
バカな理由に思わず、近くにあった机に頭を叩き付けてしまう。かなりの勢いで頭を打ったため机に罅が入る。
ぐおおぉぉ。強く叩き付けたせいであ、頭が……！
しかし、私の思いとは裏腹にカエル顔の医者は真面目な様子で答える。

「すぐに向かうから手術の準備を」
　カエル顔の医者の言葉を聞いた看護師さんは手術の準備をするため、急いで走り去っていった。
　カエル顔の医者は立ち上がり、頭をさすっている私の方を向く。
「聞いた通り、急患が入ってしまってね。診察は終わったから後は受付から薬を受け取ってくれ」
「はい。……しかし、またバカなことで怪我してますね」
　原作再現やりたいがために切腹って……。ドッペルで妥協すれば良いものを。
　カエル顔の医者は朗らかに笑う。
「ははは。この都市では珍しいことじゃないよ。君が来る数時間前にも小鳥遊六花君も同じような理由で怪我したしね」
　二回戦対戦だった六花さんを思い出す。華奢な見た目とは裏腹に三メルトルを超す巨大錬金鋼を使う武芸者でした。……目から衝剄出し過ぎた結果右目が大量出血して自滅しましたが。
　あの後、病院に行ってどうなったのか少し気になったのでカエル顔の医者に訊いてみる。
「六花さん、二回戦の対戦相手で眼から衝剄を放ち過ぎて失明したんですよね。大丈夫

だったんですか？」

「ああ、六花君ならは右目を金色の錬金鋼の義眼にして『邪王真眼に『魔具アルケミア・エーデルシュタイン』と融合して真・邪王真眼に進化した……！』って喜んでたよ。と……そろそろ急がないといけないから僕はもう行くね。お大事に」

そう言って診察室の奥の廊下を走り去るカエル顔の医者。

この都市の転生者たちの溢れるどころか、実際に血をドバドバ溢れ出す原作愛に深くため息を吐いて診察室をゆっくりと出る。

今日も変わらずコルベニクは平和です。

焼き立てのアップルパイをフォークに突き刺してパクリと口に入れる。

焼き立て故のサクサクのパイ生地と熱さによって甘みが強くなったリンゴの砂糖煮が口いっぱいに広がる。同時にリンゴの甘い香りとほのかに漂うシナモンの香りが鼻をくすぐる。

あまりの美味しさに頬が緩む。

「ン～～」

ほっぺたが落ちるとはまさにこのことですね。

頬が緩んだまま、アップルパイを一口、二口と口に入れる。

とはいえ、いくら美味しくても焼き立てのアップルパイを食べ続けるのはつらく、同じく頼んだアイスカフェオレをストローで飲む。

ミルクと甘みの強いカフェオレが私の身体を冷やす

前世ではブラックコーヒーを好んで飲んでいましたが、今世は女性なのを加え、私の身体はまだ小学生くらいのため、今ではすっかり甘いコーヒーが好みになってしまいました。

ストローから口を離して一息つく。

「……はぁ、癒されます」

汚染獣戦からテニス大会と気疲れしていた心がようやく休まります。

午後二時半。

痛み止めの薬を貰って病院を出た後、自身の腹の虫が鳴ったことでまだ昼食をすましていないことに気が付いた私は近くの喫茶店テラスで昼食兼、おやつを食べていた。

初めて来たところでしたが、味はもちろんの事、テラスから吹く軽い風と日当たり、ア

ンティーク調の店と雰囲気がとてもいいです。
「何よりも周りに転生者がいないのがいいです……」
以前、友達と言ったガンダム喫茶は酷かった。
店員の全員が転生者でモビルスーツ型の全身装甲鎧を着ていて稼働音がめちゃくちゃうるさかったり、突然、念威操者たちがガンプラ型重晶錬金鋼を使ってガンプラバトル始めたりと全然落ち着かなかった。さらに言えば、見た目が子供のせいか店員の目がすごく気持ち悪かった。キャスバルとか！　エドワウとか！　クワトロとかっ！　シャアとかっっ!!
ブルリッ。
思い出しただけでも鳥肌が立ったのでアップルパイを食べて体を温める。
「あ、お姉ちゃんだー！」
声がした方を振り向くと、そこにはランドセルを背負った妹のケイトが走ってきた。
そういえばここはケイトの通う学校の通学路でしたね。時間的にもちょうど下校時刻ですし。
ケイトはそのままランドセルを脱ぎながら私の席の対面側に勢いよく座る。
「ケイト。学校お疲れ様です」
「はい。今日も学校で楽しく勉強してきました！　……って、お姉ちゃん怪我してる!?

大丈夫？」

私の右腕のギプスに気がついて驚くケイト。

「大した怪我じゃないですよ。二日くらいで治るってお医者さんも言っていましたから。それよりもケイトも何か頼んだらどうですか？」

「じゃあ、このフルーツグラタン！」

「もう少し小さいのにしなさい。じゃないと夕飯食べられませんよ」

「でもお姉ちゃんそんな大きなアップルパイ食べてるじゃん」

確かに８センチ型のワンホールのアップルパイですから健啖家な武芸者とはいえ一人で食べるには食べごたえのある量です。

「私はまだ昼食を食べてなかったのでいいんです」

「何それずるい！　屁理屈だー！」

ずるい！　ずるい！　ずーるーいー！　と連呼するケイトの言葉を右から左と耳に流しながらしれっと言う。

「ちなみに今夜は高級焼肉です」

テニス大会で優勝副賞だった桐箱入りの霜降り和牛をケイトに見せる。赤身に刻まれたきめ細やかな白の繊維から素人でもこれが最高級の肉とわかる。

ちなみに前世よりも優れた遺伝子技術と畜産技術に、限られた都市の資源を贅沢に

使った霜降り和牛は前世の数倍の値段がする。その美味しさから他都市の人間が牛の遺伝子情報を盗もうとしたという話もあるくらいだ。
それに焼肉なら片手でも楽に調理できますし。

「あ、店員さんこのカスタードクッキーシューとオレンジジュースください」
すぐさまケイトは店員に比較的量の少ないお菓子を注文する。その切り替えの早さから互いに前世の記憶があっても血の繋がった姉妹なんだと思ってしまう。
ほどなくして、注文したシュークリームを食べるケイト。食べる仕草も私そっくりです。
「ケイト。学校はどうでしたか?」
「今日は学校の先生に褒められました!」
ケイトは誇らしく、うれしげに言う
「へぇ、何をして褒められたんですか?」
ケイトはオレンジジュースを飲んでから語る。
「アトラちゃんたちと作った『硫酸のたまった落とし穴』で不審者を捕まえました」
「何作ってるんですか……。しかも、硫酸って……不審者無事なんですか?」
「『蟲惑魔たちが作った硫酸のたまった落とし穴か……汗や髪の毛も溶け合ってそうだ

な』ってむしろ硫酸を全身で浴びて飲んでたよ」

何その超上級者な変態は。本気で気持ち悪いです。

私が不審者を想像して嫌悪な顔をしているのを尻目にケイトはシュークリームを食べながら他に学校であったこと語る。

「あと武芸の授業でみゅーずのお姉ちゃんたちが来てくれて『いくさごえ』と『ほーけーさつ』を教えてもらいました！」

「あいつら妹に何物騒な技教えてるんですか!?」

ケイトの言葉に頭を抱える。

『戦声』はまだいい。あれは剄の籠った大声を放つ威嚇技ですからケイトくらいの未熟な武芸者には丁度いい技です。

ですが『咆剄殺』はダメです。『咆剄殺』は他都市では秘奥ともされる奥義で口から放った震動波により分子の結合を破壊する技。一歩間違えば自身の肉体をも分子破壊してしまいかねない危険な技です。

「というかなんでアイドルがそんな物騒な技使えるんですか……」

「『アイドルたるもの、時として都市戦争中ライブ行うミンメイアタック、会いにいけるアイドルでなく、会いに行くアイドルとして芸能禁止の都市でゲリラライブしたり、ｉＤＯＬや無尽合体キサラギ等の巨大ロボットに乗ったりすることもあるから、アイドル

だからと言って武芸を疎かにしてはいけないのよ!』ってにこにーが言ってたよ」
　それアイドルじゃないＩＤＯＲＵです。
「それアイドルじゃないＩＤＯＲＵです」
　思わず思ったことを口に出してしまう。
　ケイトはよくわからないみたいで頭に?を浮かべて首をかしげる。
　小学校の魔境さに妹一人を置いて飛び級卒業したのを後悔する。今からでも小学校再入学できませんかね?
　そんな私の悩みを知らずか、ケイトが笑顔で聞いてくる
「確かお姉ちゃんも『ほーけーさつ』使えたよね?」
「正確に言えば『アパッチの雄叫び』ですが、まぁ使えますね」
　残り少なくなったアップルパイを突きながら答える。
『アパッチの雄叫び』ですが、名前が違うだけでやってることは『砲剄殺』と同じです。
「授業では『いくさごえ』までしか覚えられなかったからお姉ちゃん、『ほーけーさつ』教えて!」
「危ないのでダメです」
「いいじゃん教えてよー」
「ダメです」

「おーしーえーてー」
「ケイト」
ケイトの名前を呼んで私が怒ってますと言わんばかりに軽く怒気を放つ。
私の怒気にケイトは委縮してすぐさま謝る。
「ご、ごめんなさい」
シュン、と落ち込むケイトに私はため息を吐き、アップルパイの最後の一口をフォークに刺してケイトに向ける。
「はい、アーン」
「ふぇ？　アーン」
差し出したアップルパイの一口をケイトが食べて、私はフォークを皿に置いてケイトの頭をなでる。
『戦名』もらえるようになったら教えますから、それまで基礎をしっかりと磨きなさい」
自身の剄をうまく扱えないケイトに一流剄技を教えるのは早すぎる。せめて最低限の基礎を覚えて戦名を貰えるくらいにならないとダメです。
私の言葉にケイトは満面の笑みを浮かべる。
「うん！」
残ったカフェオレを飲み干して立ち上がる。同じくケイトも残ったオレンジジュー

スを飲み干す。
「さて、それじゃあ、一緒に夕飯の買い物に行きましょう。私の片手塞がっていますから荷物持ちお願いしますね」
多分、夕飯時に師匠やニャル子さん、ルリさんも来るでしょうから、副賞の和牛以外にもお肉や野菜を多めに買わないといけませんからね。
そうして、私たちは喫茶店の会計を済ませてケイトと手を握りながらスーパーまでの道を歩いていると、警視総監の夜神さんが来て、声を掛けられた。
「アインハルト君」
「あ、夜神さんどうも」
挨拶をすると夜神さんから袋が差し出された。袋を受け取ってみると中には胃薬が入っていた。
「あの夜神さん……これは一体？　って、ひゃう！」
疑問を抱いていると夜神さんがいきなり私の両肩に手を置かれた。
「アインハルト君……！　自分を、心を強く持つんだ……！」
そう言って夜神さんは立ち去った。その間、私は何がなんだかわからず、口を開けてぽかーんとしていた。
「……はっ！　え、なにどう言う事ですか!?　夜神さん！　夜神さーん！」

必死に叫ぶが、すでに夜神さんの姿なかった。

……え、本当にどう言う事!?　これから私に何が起こるんですか!?

そうして、私は夜神さんの言葉に不安に苛まれながらも、その後にあった【死闘！第一次焼肉戦争】で記憶の片隅に置いてしまい、数日後、夜神さんの言っていた意味を理解するのでした。

第9話　都市戦争と外道たち

朝の日の出の時間、海現都市フェグラウドの外縁部に集まった武芸者たちはエアフィルター越しから、肉眼で捉えられるほど近づいた都市を見ていた。

二年にごとの周期で行われる都市の動力源である金属――セルニウムの鉱山の奪い合う戦争。通称、都市戦争が始まろうとしていた。

今まさに、都市の生存を掛けた殺し合いが始まろうとしているのにフェグラウドの武芸者たちは緊張、闘志を巡らせているものは少なく、大多数の武芸者は油断と慢心しきっていた。

その原因はこれから戦う都市の旗――再誕都市コルベニクの旗を見て、海現都市フェグラウドの武芸者は誰もが勝利を確信していた。

正義もなく、人を守るため天に与えられた剄を私利私欲に使う誇りなき武芸者。

これがコルベニクの武芸者の一般的な評価だ。事実、コルベニクに住まう武芸者は武芸をアニメキャラクターの成り切り、ごっこ遊びに使っている。

武芸者の規律に関しては『犯罪行為をしなければ好きにしていい』という一文のみ。さらに言えば、前回の都市戦争でもフェグラウドはコルベニクと戦ったことがあり、その時は剣を一合も交わさずにセルニウム鉱山を渡して降伏した。そんなふざけた戦士とすら呼べない臆病者どもに人々を守るため、鍛練を積んだ我々が負けるはずがない。

数時間後。日が登り太陽の光で夜の寒さが溶け出した時刻、フェグラウドとコルベニクの外縁部が繋がった。

都市がぶつかったことで二つの都市全体が揺れ、衝突音が鳴り響く。

その音が開戦の合図となり、フェグラウドの武芸者たち第一の先陣部隊が駆け出した。

「カイザーフェニックス！」

「ラーの第三の能力発動！　ゴッドフェニックス！」

外力系衝剄の化練変化　カイザーフェニックス

外力系衝剄の化練変化　ゴッドフェニックス

刹那、二羽の炎を纏った巨大な不死鳥が空に舞い上がり、先陣部隊に突っ込んだ。

突如として現れた燃え盛る不死鳥に先陣部隊は飲まれ――否、喰われた。化練剄で産

み出された圧倒的熱量を持つ不死鳥が武芸者の血肉、骨を喰らいつくす。不死鳥が過ぎ去った場所に先陣部隊の姿はなく、黒い塊と焼けた大地だけだった。

「……は？」

フェグラウド武芸者の一人が呆けた声を上げる。

仮にフェグラウド武芸者に油断なく、カイザーフェニックスとゴッドフェニックスの威力が低く、仲間の焼け焦げた臭いや死体、断末魔が残っていたなら、恐怖や怒りの感情を湧き上がらせていただろう。だが、誰も見たことのない高威力剄技を前にフェグラウドの武芸者たちの思考は止まった。

そしてその一瞬が隙となった。

「終の秘剣　火産霊神（カグツチ）」

外力系衝剄の化練変化　火産霊神（カグツチ）

全身包帯の男が持つノコギリのような刀から炎の竜巻が創り出される。男はさらに刀身に剄を注ぎ込むことで赤く光り、それに呼応して炎の竜巻も渦を上げて肥大化する。

最早、技を超越した天災にも等しい一撃がフェグラウド外縁部に振り下ろされた。

炎の暴風が外縁部の炎の木々が、防衛用に作り上げた防護壁が吹き飛ぶ。――当然そこにいた人間も。

風切り音に混ざるは死の絶叫。肉が焼け、風が巻き上げた建造物にぶつかり、骨が砕ける音が響く。なまじ、一般人よりもはるかに優れた視覚、聴覚のおかげで仲間たちの死が鮮明に映ってしまった。

「……ッ!?　全部隊、十人隊長の元に集まり、陣形を立て直せぇ!!」

いち早く再起した百人隊長が活剄を限界に高めてフェグラウド武芸者たちに叫ぶ。

その言葉に反応し、生き残った武芸者たちは己の隊長の元に集う。先陣部隊が全滅し、炎の竜巻に包まれながらも、そこにいるのは何年も戦争をして生き残った歴戦武芸者。百人隊長の言葉で命令を聞ける程度には冷静になっていた。

二年前とは全く違う状況の焦りながらも、百人隊長は陣形が立て直されるわずかな時間で状況を確認する。

二羽の不死鳥に炎の竜巻。化け物と呼ばれる実力者が少なくとも三人はいる。だが、追撃が来ないことからそれなりに剄を消耗しているはずのだ。

不幸中の幸いに炎の竜巻の中心に大部分の部隊がいたおかげで被害は最小限で済んでいた。炎の竜巻は今も我々を囲んでいる……囲んでいる?

「ッ……!　正面に衝剄を放って突破しろ!」

百人長は敵の狙いを理解し、全力で叫ぶ。

この炎の竜巻は我々を殺す災害ではなく、逃がさない檻なのだと。しかし、それに気

がつくのが致命的なまでに遅かった。
炎の檻の中、影が差した。
「ちっちぇえな」
見上げるとそこには化練剄で創り出された２０メルトルはあろう、炎の巨人の肩に乗った長髪の少年がフェグラウド武芸者を見下ろしていた。
外力系衝剄の化練変化　スピリット・オブ・ファイヤ
炎の巨人……否、炎の大精霊の拳が振り下ろされる。
その日、海現都市フェグラウドは炎に包まれた。

※

「かはっ!?　……うぐっ」
百人隊長が目を覚ます。しかし意識を取り戻しただけで体は回復しきっておらず、耳から捉える音は掠れ、瞳から映し出す光景も霞んで見えた。周りから溢れ出す殺気と呼吸する時に送られる熱い空気から戦争はまだ終わっておらず、自分はまだ戦場の只中に

いるということだけが理解できた。
活剄を全身に巡らせて回復にかかる。
彼の最後の記憶はスピリット・オブ・ファイヤの拳が振り下ろさせる所まで。あの時、百人隊長は全力で自身の前に衝剄を放ち、回避と防御を同時に行うことで九死に一生を得た。傷も軽く、やけどと打撲程度ですんだのはまさしく奇跡と言えるだろう。
あと数秒もすれば全快とはいかないが戦える程度には動ける。まだ戦える。戦争は終わってない。フェグラウドは負けちゃいない。仲間を助けに向かわなければ……！
状況確認をするため、内力系活剄で視力を強化する。百人隊長が最初に目にしたのは炎に包まれたフェグラウドだった。都市の外延部の森は焼けてない木々がないほど燃え盛る。この都市を滅ぼそうとしている獄炎は「世界最後の海」と呼ばれる水と陸が混ざり合う街にまで広がり、軒並みの建造物が炎によって崩れ落ちていた。
次に見えた光景は仲間がコルベニク武芸者に蹂躙されている姿。
「北斗剛掌破ッ！」
外力系衝剄の変化　北斗神拳　北斗剛掌破
世紀末覇者の掌から放たれる衝剄と言う名のビームにフェグラウド武芸者は粉みじんにされ、背後にあった建造物は吹っ飛ばされる。
「お前もしかしてまだ、自分が死なないとでも思っているんじゃないかね？」

内力系活剄の変化　１００％

上半身裸の、紫色の肌をしたＢ級妖怪が繰り出す拳にフェグラウド武芸者は放物線を描きながら都市外まで飛んだ。仮に生きていたとしても都市外の汚染物質で腐り、焼け死んだだろう。

「絶対に許さんぞ、虫けらども！　じわじわとなぶり殺しにしてくれる！」

外力系衝剄の変化　デスビーム

白い肌に尻尾が生えた、宇宙の帝王の指先から赤い光線が放たれる。フェグラウド武芸者は迎撃しようと剣から衝剄を放つが、デスビームは衝剄ごと貫通し、彼に突き刺さる。

「お前はこのディオにとってのモンキーなんだよォォォォ――――ッ！」

外力系衝剄の化練変化　気化冷凍法

悪のカリスマにして帝王な吸血鬼がフェグラウド武芸者の腕を掴む。掴んだ手から絶対零度の化練剄がフェグラウド武芸者に送り込まれ、数秒もしないうちにフェグラウド武芸者は悲鳴を最後に血液の一滴も残らず、凍らされた。

「滲み出す混濁の紋章

不遜なる凶気の器

湧き上がり・否定し・痺れ・瞬き・眠りを妨げる

爬行する鉄の王女
絶えず自壊する泥の人形
結合せよ　反発せよ　地に満ち己の無力を知れ
破道の九十　『黒棺』！」
外力系衝剄の化練変化　波動の九十　『黒棺』
崩玉と融合した死神が無駄にカッコいい、剄技をするうえで全く意味のない詠唱を終えた瞬間、フェグラウド武芸者たちが剄の黒い箱に閉じ込められる。中から響くのは断末魔。『黒棺』解かれた時、残ったのは血だまりだけだった。
「何故なら私は魚雷だから――！」
魚雷に手足を生やしたナマモノがフェグラウド武芸者に突撃する。
……もうなんかいろいろと酷かった。効率を無視して無理やり剄技に昇華させたコルベニク武芸者が大暴れしていた。宇宙人といい、魚雷のナマモノといい、明らかに人間じゃないやつもいた。
百人隊長は現在の戦況からぼんやりと思う。
この戦争は我々の負けなのだと。
動ける程度に回復した身体を殺剄で気配を消しながら、百人隊長は立ち上がる。負け戦だ。だが、まだ戦争終了の鐘は鳴っていない。ならば一人でも多く仲間たちが生き残

れるように敵と戦わなければ……！

呼吸を止め、足音を消し、剣を構える。脚に活剄を込めて、瞬速で近くにいるバスケユニフォームを着た赤髪の少年に向かい唐竹に切りかかる。完璧なタイミングだった。勢いも剣速も怪我人とは思えないほどの流れに乗った一撃。だが、赤髪の少年は後ろに目があるかのように軽く右に一歩、横に進んだだけで百人隊長の一撃を躱し切った。

内力系活剄の変化　天帝の眼（エンペラーアイ）

「頭が高いぞ」

赤髪の少年は振り向いて右手に持っていたハサミで一突き。吸い込まれるように百人隊長の胸に刺さった。痛みよりも先に感じたのは全身に巡る剄路が途切れて全身の感覚が消える。

――――徹し剄か!?

たった一突きで百人隊長は正面に倒れ伏した。それも錬金鋼でもなんでもないハサミで。都市の隊長が反応できない速度で剄脈を破壊する程の技量。それも自分の半分も生きていないであろう少年が。

赤髪の少年は止めを刺さずに立ち去る。彼からすれば目の前に飛ぶハエが邪魔だったから手で払っただけで殺すほどではなかった。それに徹し剄の流した感覚からハエは再起不能に違いなかった。

去ろうとしている背中を見ながら百人隊長は叫ぶ。
「待て！　それだけの強さがあったなら何故２年前、無条件降伏なんてしたんだ!?」
それはフェグラウド武芸者が誰もが疑問に思っていたことだった。他都市とは比べ物にならないほどの力を持ちながら一切抵抗せずに都市の生命線とも入れるセルニウム鉱山を渡したのか。
その理由は一つ。
赤髪の少年は振り向いて答える。
「あの日、夏コミがあったからだ」
単にコミケに参加したいから武芸者の大半が都市戦争をボイコットしただけである。

※

「これはひどい」
コルベニクの外縁部の後方防衛部隊にいる私は活剄で強化した目から見える数キルメルトル先のフェグラウド外縁部の戦場を見て口に出す。これがこの都市の普通の戦

争風景なのがさらにひどいです。
「オロロロロロロロロ……おぇっ」
「……大丈夫ですか?」
今年、戦名を授かり一人前の武芸者になったニャル子さんは戦争初参加のためか、初めて見る人の中身や風から流れる血の臭いを肌に感じ、吐瀉物を吐き出す。
口から乙女が出しちゃいけない物質を出しまくってるニャル子さんの背中を優しくさすり、口元をハンカチでぬぐう。
「だ、大丈夫――ッぷっ……アインハルトちゃんは平気なんですか?」
「私は6歳のころから見ていますからね。吐かない程度には見慣れています」
コルベニクの武芸者は前世の記憶があり、精神が成熟しているためか戦名があれば幼少のころから戦争に参加させられる。18歳までは前線部隊に入れず、大体は後方部隊での見学ですが。
私も戦争初参戦の時はゲロゲロと吐きましたけど、かれこれ三回目の戦争。人の死に動じない程度には耐性できています。
「それにしてもみなさん、ためらいなく殺してますね……本当に前世、ただのオタクだったんですか?」
成り切りしてる世界出身でも驚きませんよ。とニャル子さんが怯える。

「これは師匠の受け売りなんですが……私たち転生者は死生観における倫理が崩壊してるらしいです」
「どういうことですか？」
「ニャル子さんは死ぬのは怖いですか？」
「え、そりゃ、怖いに決まってますよ」
「本当に？　痛いのが嫌、友達と別れるのが嫌、程度じゃないですか？　前世の時みたいに未知への恐怖、本能からの絶対的な死の恐怖はありますか？」
「……」
　私の言葉にニャル子さんは考え込む。１０秒、２０秒と彼女は考えますが、返答はない。それがニャル子さんの答えだった。
　当時、師匠に言われたことをそのまま伝える。
「『私たち転生者は死が何かを理解している。故に死の恐怖はなく、死ぬとどうなるか理解しているからこそ、殺しへの忌諱が少ない』」
　転生者の最大の強みは前世の記憶じゃない。死への恐怖ないこと。死の恐怖がないこそ命のチップが軽く、文字通り命がけで鍛錬し、遊び感覚で命を掛けられる。
　ですが、倫理観抜きにしてもコルベニクには戦える転生者が多い気がする。元々そういう才能がある人間を選んで呼んでいるのか、コルベニクが何かをしているのか。

……師匠やジョゼフ武芸長あたりはと何か知っていそうですが。

思考を切り替えて戦う武芸者たちを見る。

私はまだ人を殺したことはありませんが殺す時……ためらいなく殺せると思う。誰かに恨まれるのが面倒。返り血とか臭いが着いたら嫌だなぁ程度の忌諱しかない。

これが私たち。人間の姿をした転生(かいぶつ)者。

ニャル子さんがぽつりと呟く。

「……私たちとこの世界、どっちが狂っているんでしょうかね？」

「どちらも……じゃないですかね」

人間と誤魔化しながら生きている私たちも、汚染物質に満ちて都市の中でしか生きられず、二年ごとに殺し合いを強制させる現実味のない世界。どちらも狂っている。

私とニャル子さんは真っ直ぐと戦場を見つめる。フェグラウド武芸者、コルベニク武芸者、互いに血を流しながら戦っている。

数十分後、フェグラウドの一番高い建造物に白い旗が立ち、降伏の鐘が鳴り響いた。

※

転生者たちがいつも通り都市戦争で遊んだ数日後、私は師匠に呼ばれて練武館の会議室に来てパイプ椅子に座っていた。

正面には都市の頂点である八相が座っていた。

……超帰りたいです。だって会議室は何故か電気を消しており、全員ご丁寧に机に両肘を立てて両手で口元を隠す『ゲンドウポーズ』をしているんですもん。嫌な予感しかしません。

ジョゼフ武芸総長が口を開く。

「よく来た。アインハルト」

「はぁ……。それで何のようでしょうか。八相のみなさんに呼ばれるようなことをした覚えはないのですが？」

私の質問に答えたのは阿笠博士。阿笠博士の眼鏡が黒幕だと信じるくらいにあやしく光る。

「アインハルト君が何かしたというわけじゃないから安心するといい。……君は選ばれたんじゃよ」

師匠が椅子から勢いよく立ち上がり叫ぶ。

「〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画〟及び、〝ぼくのかん

がえたさいきょう転生者育成計画〟に！」
「おめでとう」
「おめでとう」
「おめでとう」
「おめでとう」
「ミクダヨー」
「おめでとう」
「おめでとう」
八相全員が立ち上がり、パチパチパチと喝采の拍手。
エヴァ最終回ばりのおめでとうコール。
ルリさんが念威端子から『翼をください』を流す。
……どういうことですか？
※

ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画。
よくある二次創作のように、この世界の原作である『鋼殻のレギオス』の舞台である学園都市ツェルニに私たち転生者をぶち込んで原作介入させる計画。送り込むのはツェルニの小隊人数の最大人数の７人。原作介入するであろう都市外転生者の排除も目的に入っているらしい。
ぼくのかんがえたさいきょう転生者育成計画。
〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画〟と並行して行う計画で原作介入させる転生者一人に、コルベニクに現存する数万にも及ぶ剄技を習得させる計画。原作介入できる現在、１０～１５歳の転生者の中で総合的に一番優秀な私が選ばれたとのこと。
二つの計画を軽く聞いた私はバッサリと一言。
「お断りします」
私が断ることを予想していたのか、八相たちは驚いた様子はなかった。
眉を潜めたジョゼフ武芸総長が理由を訊く
「ふむ……何故じゃ？」
「私、原作知りませんし、興味もないので。それに妹を一人にさせるとかありえません」

私が『鋼殻のレギオス』で知っていることと言えば、転生者たちが言うツェルニとグレンダンという都市と『天剣』と呼ばれる称号と武器だけ。さらに加えると妹のケイトは前世の記憶があるとはいえ、精神年齢は肉体と同じ小学生程度。原作時期の五年後でもケイトは14歳。とても一人にさせる年齢ではありません。

師匠が思いついたように人差し指を立てる。

「じゃあ、ツェルニに行っている間、私がケイトちゃんの面倒見るってのは?」

「師匠……料理できるんですか?」

「これでも長い間『高町なのは』の成り切りやってるからね。和食から洋食、お菓子も作れるよ」

師匠が自慢げに胸を張る。

……そういえばこの前一緒に皿洗いしていた時、結構手際よかったですね。

「それでもお断りします」

断固拒否! という態度を取っているとジョゼフ武芸総長が困ったかのように呟く。

「それなら仕方ない。少し強引な手を使うしかないかの。この話を断るというなら――」

その言葉に私はジョゼフ武芸総長を睨み、軽く殺気を散らす。

もしケイトに何かするようなら……。

「アインハルト家の庭にミントの種をばら撒くぞおおぉぉッ!!」
「小学生ですかッ!?」
何て地味な嫌がらせを……!
ミントは匂いが強くて雑草並みの繁殖力あるんですよ。そんなものがばらまかれた日には我が家の庭の土から作り替えないといけない事態なってしまいます。
私が苦々しい表情をしていると海馬社長が口元に笑みを浮かべてしゃべる。
「アインハルトくん、最近、君の住んでいる家の両隣に引っ越してきた人がいるだろ?」
「ん?　はい。そうですが……」
あれ?　私の名前を呼び捨てではなく君付け?
「――ってまさか……!?」
海馬社長の口調や声の高さに違和感を覚えて社長を見てはっ、と気づく。
暗くてわかりませんでしたがよく見ると海馬社長を髪の色が茶色じゃなくて緑色。
あの姿は遊戯王初期の海馬社長。通称――キャベツ。
「あの家は我が社の社員、磯野と中島の家でね……」
そう。『遊戯王』原作初期に置いて武藤遊戯の祖父が持つ青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）を破り捨てたのを始めに青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）を手に入れるため、所持者を破産や自殺にまで追い込んだ外道キャベツ。

「そして今夜の磯野家と中島家の夕飯は庭でくさやとシュールストレミングでバーベキューだぁぁぁッ!!」

「この人最低だあああぁぁぁッ――――――――!!」

わざわざ両隣の家を購入してまでやることですか!?

海馬社長は愉悦顔で笑う。

「僕たちの計画を受け入れなければ、君の家がミントとくさやとシュールストレミングに汚染されるぞぉ！　そしてその臭いが原因でサザエさん成り切りの磯野君と中島君が学校でいじめられるかもしれんなぁー！」

「磯野家と中島家まで巻き込むのやめましょうよ!!」

自分の部下まで人質に取りますかこのキャベツ。

しかもこの人たち、私の沸点を見抜いてやっているのが腹立ちます。

仮にケイトを人質に取る等の単純な作戦でしたら、コルベニク全てを敵に回す覚悟でケイトを助け出して都市外に逃げますが、こんな嫌がらせでこいつらを殺すほど殺る気は起きない。

臭いテロなんて起こされたら、我が家は数カ月、人が住める家じゃなくなります。

例え引っ越して逃げても、間違いなく追ってきてシュル缶テロ起こすでしょうし……。

この状況を脱しようと八相たちを見る。
なのは師匠、ジョゼフ武芸総長、阿笠博士、海馬社長を見ると愉悦顔。――この外道どもを説得するのは無理ですね。
ルリさんは――眼逸らされました。
ミクダヨー――論外！
夜神さんは――――。
「警察にも……捕まえられない人間がいるんだ……ッ！」
「警察が権力に屈さないでくださいよ！」
男泣きするあたり、本気で言っていますね。
まずい。味方が誰もいません……！
完全に詰みに入った状態でジョゼフ武芸総長は止めとばかりに言う。
「もう一度言おう。アインハルト、この計画を受けてくれるかね」
「それは……」
「磯野、七輪の準備はできたな？　なら――」
「受けます！　受けさせていただきます！」
磯野家と電話している海馬社長の言葉を遮るように叫ぶ。海馬社長は携帯電子機器のボタンを押して通話を切る。

イェーイとハイタッチする八相たち。

私の承諾の言葉を聞いて話は終わったのか、八相たちはぞろぞろと会議室を去っていく。

「じゃあ、明日から〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者育成計画〟始めるからねー。あ、ツェルニに行ったらケイトちゃんの事はしっかりと面倒見てあげるから安心してね」

「最初は剄技を速く身に着けるためにコピー能力を習得してもらう。鑢七実を始めとしたコピー能力者たちと特訓じゃ」

「ミクダヨー」

「我が社のアクションフィールドを使い、どんな環境でも戦えるように鍛え上げてやるから期待していろ」

「錬金鋼の調整はワシ等がしっかりとするから安心するといい」

「私もツェルニに行くことになりましたので一緒に頑張りましょう」

「……すまない。ぼくは警視総監失格だ」

夜神さんの言葉を最後にパタンと会議室の扉が閉まる。

……この日、私は生まれて初めて慟哭の叫びを上げた。

第１０話　今日はお休み！

八相――もとい外道どもの計画を受けて数日後、原作介入候補となる優秀な武芸者たちに〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画〟が知らされた。

それを聞いた転生者たちの反応は様々だった。原作介入するべく、より己を鍛えるもの、自身の研究に熱を上げるもの、原作に興味がないもの。

とはいえ、この計画を起因として若手武芸者たちの武芸が盛んになったのはよいことなのでしょう。

私も〝ぼくのかんがえたさいきょう転生者をツェルニに送ろう計画〟によって地獄すら生温い特訓が始まりました。――これに関しては後程語ります。

そして束の間の休日、私、ニャル子さん、ルリさんのいつもの三人で遊ぶことになり、集合場所のファミレスに入ったのですが……。

「うぼぁ……」

「かゆ……うま……」

「あびゃ～……」

私含め、全員テーブルに顔を突っ伏していた。ＦＸで全額溶かしたような顔で口から

エクトプラズマ的なものが出ている当たりかなり危ない。
「お、お客様、ご注文の品をお持ちいたしました」
注文の品を持ってきたウェイトレスの声が震える。死体のように突っ伏している人間が三人もいるのだから無理もない。
私はテーブルに置いてくださいと眼だけ動かしてジェスチャーする。
その動きにウェイトレスは睨みつけられたと勘違いしたのか、ひぅっとビクつく。
一瞬、料理を落としそうになりながらも、震えた手つきで注文した料理と飲み物をきちんと置いた。
「ご、ごゆっくりどうぞ!」
勢いよくお辞儀してウェイトレスは脱兎のごとく逃げ出す。
その間、私たちは動かない。ひたすら口からエクトプラズマを吐き出している。
数分後、飲み物の氷が半分ほど溶け出した所で私はふらふらになりながらも顔を起こす。そしてゆっくりとストローを咥えて青く発光するコーラ――ヌカコーラクアンタム（放射性物質なし）を飲む。味、炭酸、カフェイン、カロリー、全てが二倍というヌカコーラクアンタムの強烈な味によって一気に目が覚める。
「……二人とも大丈夫ですか?」
私の言葉に二人ともゾンビのようにギギギと関節音を鳴らしながら起き上る。

「……大丈夫じゃない」

「……大丈夫じゃありません」

そう言っていますが、二人とも何かを食べられる程度には回復したのか、無言で料理を食べる。

私もそれ以上会話する余裕がないので無言でエビのトマトクリームパスタをフォークで巻いて食べる。少しでも体力回復するために内力系活剄で内臓を強化して食べたものを高速で消化、吸収を繰り返す。

私たちは一言もしゃべらず、ひたすら料理を口に入れる。ひたすらに。

結局、話をできるようになったのは料理を全て食べ終えた後だった。

※

「で、私が言うのもなんですが、二人とも何があったんですか？」

食後のティータイム。私含め、三人とも会話できる状態になったので、ニャル子さんとルリさんが何故ＦＸで全額溶かしたような状態だったのか訊いてみる。

私の質問にルリさんが疲れ気味に答える。
「……ツェルニ行きが決まって私もある人と特別訓練が始まったんですよ」
「ルリさんに教えられる人なんているんですか?」
ルリさんはコルベニク一の念威操者で念威総長だけあってその実力も突出している。それこそ、今すぐ念威を使い、ハッキングしてコルベニク経済を文字通りひっくり返すくらい簡単にできる。
そんなルリさんが自主訓練じゃなくて誰かと特別訓練?
「アムロさんとマンツーマンで実戦訓練されました」
「ああ～」
アムロさんですか、納得です。
この都市の武芸者に最高の念威操者と聞かれれば、誰もがホシノ・ルリを上げるだろう。だが、最強の念威操者と聞かれれば違う。武芸者たちはこう答えます。
最強の念威操者はアムロ・レイと。

――――アムロ・レイ。

身体能力が一般人である念威操者でありながら、念威で集積した情報から相手の動き

を予測する超能力的直感。その情報を高速で処理することで武芸者を超える反応速度を持つ頭脳。その二つを武器に念威操者なのにそこら辺の一般武芸者よりも強いという、ある意味、師匠よりも人外な人物である。

当然だが、武芸者をサポートする念威操者に戦闘能力なんてものはほとんど必要ない。精々、念威端子を爆発させる念威爆雷による最低限の自衛能力があればいい。

決して、念威端子をファンネルに魔改造して雷性因子砲撃（ビーム）を打つような職業ではありません。

ルリさんは再び、顔をテーブルに突っ伏す。

「おかげでアムロさん曰く、ニュータイプＬｖ６、切り払いＬｖ３になりました……。今じゃ雷性因子剣（ビームサーベル）で銃弾を切れます。成り切りとはいえ、二次創作でも私ほど魔改造されたホシノ・ルリはそういませんよ……。

ふふふ。私がガンダムになれる日は近いですよ。……私はガンダムだ。私はガンダムだ。私はガンダムだ。私はガンダムだ。私はガンダムだ――――」

「――てりゃ」

ニャル子壊れてきたルリさんの頭を軽く叩く。昔の家電製品じゃないんですから……。

しかし、いい具合に叩けたのか、ルリさんは「はっ、私は何を……」と目覚め、ガン

ダムの洗脳が解けた。
「……というわけで、アムロさんに天狗の鼻を見事にへし折られましたよ。３分で武芸者９人も倒せない私が念威総長とか笑っちゃいますね」
「いや、普通、念威操者は武芸者一人も倒せませんから」
　私の言葉にニャル子さんもうんうんと頷く。念威操者がそんなに強かったら私たちがいる意味がないです。
「私はそんな感じです。お二人は何があったんですか?」
「私は――」
　と、何があったのか語ろうとした時、ニャル子の瞳がハイライトに変わった。
「ニャル子さん……?」
「……ああ、すみません。ちょっとこの前の事を思い出していました」
　そう言ってニャル子さんはカップを持ち、アンゼロットの紅茶――ニャル子さん曰くいろいろ下がる味らしい――を飲み干した。
「……安易な手段で強くなるものじゃないですね」
「……一体なにがあったんですか」
　ニャル子さんの瞳のハイライトが消え、ゆっくりと答える。
「……カガクノハッテンニギセイハツキモノデース」

「あっ……」

その言葉だけで私たちは彼女が何をしたのか理解した。

念のため、私は彼女に確認する。

「……受けたんですか？」

「……はい」

「失敗したと？」

「いえ、手術は成功しましたよ。身体能力も上がり、剄脈も以前よりも増えました。……ですが、私の知らない剄技が使えたり、変化球を投げれるようになって、自分の身体が全くの別物になったような感じがしてすごく怖いんです。

……さらに言えばリアルでパワポケの裏サクセスルートに踏み込みました」

ニャル子さんの顔が青白く染まり、ぶるぶると震える。

ＳＡＮ値ピンチだった。いつ発狂してもおかしくない状態だった。改造手術に加えてパワポケ時空を体験したんですから無理もない。

……しかし、解せません。

「なんでニャル子さんは改造手術をしてまで強くなろうとしているのでしょうか？」

ニャル子さんはよくも悪くも同年代では上位に入る優秀な武芸者だ。多少、強さへの渇望はありましたが薬や人体改造をするほどではありません。

ニャル子さんが悲しく笑う。
「最強とかチートみたいな強さは欲していませんよ。自身の身の丈は分かっていますから。……ただ、私も親友として二人と一緒に同じ学校に行きたいんですよ。
でも私はお二人ほど強くないですからちょっとした邪道にでも走らなきゃ、一緒に並び立てないんですよ」
「ニャル子さん……」
「ま、改造はダイジョーブ博士に懲りてもうやりませんから安心してください。……それに最近、ＲＸ師匠が妙にやる気を出してしまったせいか最近、仮面ライダーの皆さんたちと一緒に特訓したり、ショッカー退治に行くようになりました」
笑っているが、目はいい具合に濁っていた。
なお、この都市ではライダーとショッカーのように敵対する組織同士で模擬戦をちょくちょく行っている。
「だ、大丈夫なんですか?」
「……クリムゾンスマッシュを防げるショッカー戦闘員たちと毎日殴り合う、ホワイトな職場ですよ」
「それ絶対ショッカー戦闘員じゃないですよねッ!?」
クリムゾンスマッシュがショッカーに防がれる仮面ライダー５５５とか見たくない。

でもクリムゾンスマッシュ防ぐショッカー超見たい。
「そんなわけでここ毎日ショッカー共に『一本でもニンジンならぬ一人でもニャル子キック』を放ったりしています。……そして本命の」
「――アインハルトさんは何があったんですか？」
二人はずいっと顔を近づける。
……なぜ、私の話が本命なんですか？
「私たちの中で一番ハードな特訓してますので」
「ぶっちゃけ、アインハルトちゃんが一番厄ネタ背負ってますし」
「酷い言いぐさですね……」
確かに間違ってはいませんが。
「はぁ……。この前、魔法を学ぶために魔法少女の成り切りが集まる遊園地『マジカルランド』行ったんです」
「超絶カオス組織の所じゃないですか……」
「『病院』『教会』に並ぶ狂組織ですよ」
二人が驚く様子を見て改めて理解する。やっぱあそこやばい所だったんですね。
「マジカルランドですが、初めはリリなの系の成り切りも沢山いて結構楽しく修行してたんですが……マジカルランドの抗争に巻き込まれました」

「「どういうこと!?」」

二人が驚愕してはもる。うんわかります。私も最初にそんな感じに驚きました。

マジカルランドに関して説明する。

「マジカルランドにいる魔法少女たちはいくつもの派閥があるんですよ。

『プリキュアシリーズ』『カードチャプターさくら』を始めとした王道系魔法少女がいる東映会。

『結城友奈は勇者である』『戦姫絶唱シンフォギア』などのがいる変身ヒロイン会

『魔法少女まどか☆マギカ』『魔法少女育成計画』などの反魔法少女がいる深夜組。

『大魔法峠』『撲殺天使ドクロちゃん』などの邪道魔法少女がいる組織ＯＶＡ

今回はこの四組が来季魔法少女アニメ放送枠で争いが起きたんですよ。」

ちなみに私が修行していたのは『魔法少女リリカルなのは』『プリズマ☆イリヤ』が所属する角川組。角川組は深夜組と兄弟組織のため今回の抗争に巻き込まれました。

「どこのヤクザ組織ですか……」

「この都市の魔法少女はモノホンヤクザでしたよ」

血で血を争う戦いだった。魔法少女の姿をした龍が如くでしたよあれ。

「プリキュアたちに集団リンチされたり、超巨大錬金鋼ホムリリーと戦ったりと何回か走馬灯見えましたよ。……これ以上いたらやばいと思って大量の魔法少女たちの技を

『見稽古』で速効で覚えて速効で逃げ帰りました」

はははは……死んだ魚のような目で当時を思い出す。

逃げ帰った数日後、マジカルランドが崩壊して遊園地が営業停止しましたが、何が起きたか知りませんし、知りたくありません。

「と、マジカルランドはこんな感じでした。師匠の命令で次は忍術を忍びの里に行ったんですが……」

「まだあるんですか……」

「マジカルランドで結構お腹いっぱいなんですが」

二人の言葉を無視して話し始める。ここまで話したんですから、起きた事全部吐き出します。

忍びの里。

名前でわかるでしょうが、忍者系の成り切りが集まるところで、ＮＡＲＵＴＯ、バジリスク、閃乱カグラ、ニンジャスレイヤー等が集まっている。

「忍術と言ってもただの化練剄の応用技ばかりでしたからね。いくつかは簡単に習得できましたよ。……ついでに忍殺語検定準一級を合格しました」

「なんで漢字検定みたいなノリでそんなもの取得してるんですか……」

「取らないと返してくれなかったからですよ！」

逆切れしてしまう。
おかげで今の私はニンジャスレイヤーの成り切り達と違和感なく忍殺語で会話できたりします。
まぁまぁ、とルリさんがなだめるように言う。
「履歴書に書ける資格が増えてよかったじゃないですか」
「履歴書にそんなもの書けませんよ!」
もし私が面接官ならそんなふざけた資格を書くやつは絶対に落とします。
私は荒げた息を落ち着くため、ヌカコーラクワンタムを飲み干して一息つく。
「そんな感じで私は口から火を吐いたり、閃乱カグラの成り切り忍者の服を破いたり、アイエエエエエエッ!と、叫んでたりしてたんですが――」
うん。この時点ですごいカオスですね忍びの里。まぁ、１０年もこの都市で育ったせいかある程度耐性ができましたけど。
だが、あれには耐えられなかった。
「あそこ……対魔忍までいたんですよ……!」
「「うわぁ……」」
二人がドン引きする。
対魔忍。

前世ではブラウザゲームにまでなった有名な……エロゲである。
レイプ目になりながらもその時の様子を思い出す。
「ははは……。私、真珠入りの男性のあれとか馬のあれとか初めて見ましたよ……」
今、思い出してもトラウマガガガガ。
１０歳の少女になんてものを見せるんですかあいつら。
さらに女性が『んほおおおぉ！』とか『あひいいいいぃ！』とかされているのを見ました（一種のプレイだったらしいですが）。
ちなみに、その時の様子を見た大人たちは無垢な少女に無性ポルノを見せるようないい笑顔してたんで全員ぶちのめしてから都市警に通報し、ブタ箱に入れてもらいました。普通に犯罪だったので。
「そして夜な夜な対魔忍たちが襲ってくるんですよ。負けたらエロ同人みたいにされると思ってマジカルランドよりも怖かったです。恐怖に泣きながら戦いました」
しかも対魔忍全員魔族化して悪堕ちしていました。ちょろすぎですよ対魔忍……。
そんでもって不死身、瞬間移動できる対魔忍とかいて全員強い。快楽にはよわいくせに。吸血鬼アサギさんめっちゃ強かった。前世で最強の対魔忍（笑）とかバカにしてすみませんでした。
貞操の危機を思い出して、顔が青白くなりぷつぷつと鳥肌が立つ。涙腺もちょっと緩

んで涙が出そうになる。

二人が励ますように両肩をやさしく叩く。

「アインハルトちゃん、今日は修行を忘れて思いっきりに遊びましょう!」

「そろそろ映画の時間です『ルパン三世ＶＳシティハンター』楽しみにしてたじゃないですか。キャラメルポップコーンおごりますよ」

「ニャル子さん……ルリさん。う、うわあああああああん!」

そんな二人の優しさに私は二人の胸を借りて全力で泣いた。

怖かった……本当に怖かったです!